

序

余市町は、北部を石狩湾に面し、東・西・南の三方は500 m程度の山で囲まれ、鯉の千石場所として発展した海岸の町で歴史も古く、北海道としては比較的気候の温和な場所といわれております。また、1,500年程前の貴重な遺跡であります国指定史跡フゴッペ洞窟を始め、多くの考古資料を保有し、埋蔵文化財包蔵地も50ヵ所以上点在いたしております。

本調査は、この包蔵地の中で最も広範囲で多くの土器・鉄器等が出土するであろう大川遺跡の初年度分を発掘調査したものであります。

これは、昭和59年度より北海道が実施中の「余市川改修事業」に起因し、河川用地の拡幅による潰地で大川地区約20,000㎡が協議区域となりました。そのうちの約17,500㎡を文化財保護法に基づき年次計画による発掘調査を行うものであり、事業主体の北海道より余市町が委託を受け余市町教育委員会が調査業務を行ったものであります。

平成元年度は、初年度として約3,500㎡の発掘を完了し、現在出土品の整理分析中ではありますが、出土点数は10万点に及びます。その概要は、住居址・墓塚・土壇・濠・溝・貝塚・焼土等によって構成される縄文文化期から近代にかけての複合遺跡であり、今後の調査に大きな期待を抱いているところでございます。

今年度第1次調査の概報発刊にあたり、調査原因者であります北海道小樽土木現業所の深い御理解と御協力をいただいたことに対し、厚く感謝とお礼を申し上げます。

また、この調査に対し、多大の御指導と御協力を賜りました関係機関の各位に対し心より厚くお礼を申し上げますとともに、今後の調査に対しましても一層の御指導・御協力を衷心より申し上げる次第でございます。

この概報が大川遺跡発掘調査の先駆として余市町の歴史、文化理解の一助として活用いただけますれば幸と存じます。

平成2年3月

余市町教育委員会

教育長 笹山 義孝

例 言

1. 本書は、余市川改修事業に伴い緊急発掘を実施した大川遺跡第1次発掘調査（1989年度）の概報である。
2. 北海道小樽土木現業所の依頼を受け、余市町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 今年度の発掘調査面積は約3,500㎡。調査は、4月1日～5月31日（準備）、6月1日～10月31日（発掘調査）、11月1日～3月31日（整理作業）に亘って実施した。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者 余市町教育委員会 教育長 笹山義孝
事務局 余市水産博物館長 三浦清治
文化財係 小林広勝

調査担当者 宮 宏明（調査員）

調査補助員 熊崎農夫博・鎌田 望・高田純子

男性作業員 菅原宏文・片岡常夫・平野政秋・和田雅男・西村則夫・久保田浩章
（以下発掘のみ）滝山 烈・杉本英二・畠山義之・相川卓也・千葉信司
山下哲史

女性作業員 生玉さく子・扇谷陽子・柏谷龍子・櫛引葉子・斉藤麻紀・田村裕美
野村晴美・畠山香代子・福いずみ・前田貞子・三上勢津子・米谷登志子
（以下発掘のみ）石栗伸子・今井福子・加藤輝美・柏谷スミエ

川島スミ子・川又智恵子・久保照代・久保文恵・小池シズエ・後藤文栄
斉藤保子・神 親子・鈴木百合子・田川幸子・高橋千代子・土門信子
東門田ルミ子・中村真由美・原田初江・堀川君子・松田文枝・宮川典子
山口路子・横本京子・横山由紀子

事務員 吉野葉子・増田直美・江川美智子

5. 遺跡・遺物の分析・同定ならびに原稿執筆については、下記の各位に依頼した。

大川遺跡周辺の歴史的背景と旧上ヨイチ運上家について 日本民俗学会会員 佐藤利雄
遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定 学習院大学 木越邦彦
地形・地質と堆積構造・層序区分 日本地質学会会員 松田義章
花粉分析 ジオサイエンス(株)・五十嵐八枝子
炭化種子分析 北海道大学 吉崎昌一・椿坂恭代
動物遺存体の同定 早稲田大学 金子浩昌
人骨の同定 札幌医科大学 百々幸雄・石田 肇・松村博文・大島直行
鉄製遺物の分析・保存処理 岩手県立博物館 赤沼英男・木村克則
土器の鑑定・分類 北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春
陶磁器の鑑定・分類 北海道教育庁 松下 亘

6. 本書の執筆は、5で記した各位ならびに調査員・調査補助員等が分担した。
 7. 当該調査において検出された遺構は、下記の略字をもって示した。

SH 擦文住居址、GP 墓墳、UP 土墳、MO 濠状遺構、FP 焼土、SM 貝塚

8. 発掘調査ならびに整理作業については、下記の機関と各位より御指導・御協力を賜りました。記して感謝申し上げます次第です。

文化庁、北海道教育庁、札幌医科大学、北海道埋蔵文化財センター、北海道開拓記念館

石神幸子、内田俊秀、内山真澄、上屋真一、氏家 等、大島秀俊、加藤邦雄、萱野 茂
 川真田憲治、菊地徹夫、北爪真佐夫、久保武夫、乗原康裕、河野本道、越田賢一郎
 小林幸雄、斉藤邦典、桜井清彦、佐藤一夫、沢田正昭、鈴木 信、鈴木靖民、高橋 理
 高原 孝、田賀栄子、種市幸生、辻 寧昭、鶴丸俊明、出利葉浩司、中村和之、中村福彦
 長澤和也、長沼 孝、二階堂啓也、西村良次郎、西本豊弘、野村 崇、長谷川 徹
 平川善祥、藤島一巳、藤村久和、増澤文武、松崎水穂、松谷純一、三浦孝一、三浦正人
 三野紀雄、峰山 巖、山口誠治、山下 豊、山田悟郎、山本義一、米田秀喜

発掘調査に至る経緯

1961年7月および翌年8月の2度に亘り、台風・集中豪雨により余市川が氾濫し、7億円近い被害もたらされた。このため、治水対策として1973年度から各種計画・実験・調査が繰り返され、1984年度より「余市川改修事業」が着手されることになった。

これにより、本事業区域内に分布する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いが問題となった。

当該遺跡は、本町市街地の中心部を流れる余市川の右岸河口部一帯に位置し、縄文後期から、近代にいたる各時期の遺物が確認される複合遺跡として良く知られている。そのため、町教育委員会は町建設課を通じ、余市川改修事業の実施主体である北海道小樽土木現業所から事業の詳細を聴取したところ、当該地区の除外および計画変更は不可能との判断により、文化財保護法に基づく手続きを取り進めることになった。

1987年5月25日、北海道小樽土木現業所より余市川改修事業に伴う事前協議書が町教育委員会に提出された。町教育委員会は、これを受けて北海道教育庁へ進達、協議した。1988年6月・7月・8月の3度に亘り、北海道教育庁生涯学習部文化課による埋蔵文化財包蔵地所在確認調査および範囲確認調査が実施され、記録保存のための発掘調査を要する旨の通知を受けた。これにより、余市町教育委員会が調査主体者となり当該遺跡の調査にあたることとなった。

本文目次

I 遺跡の概要	a 大川遺跡の位置	1
	b 標準層序と遺物包含層	1
II 発掘調査の概要	a 調査方法	2
	b 検出遺構	6
	c 出土遺物	8
III 出土遺物の保存処理方法とその進行状況	a 骨角器・動物遺存体の保存処理	14
	b 金属製遺物の保存処理	16
IV 分析の概要	a 大川遺跡出土の炭化種子予備分析結果	19
	b 大川遺跡出土の花粉分析結果概要報告	20
	c 大川遺跡G P - 2 出土の人骨について	22
	d 大川遺跡出土の動物遺存体	25
	e 大川遺跡周辺地域の地質	28
V 考察	a 大川遺跡出土の陶磁器について	32
	b 大川遺跡における銚帯金具出土の意義	38
	c 大川遺跡周辺の歴史的背景と旧上ヨイチ運上家について	39
VI 小括		43

写真目次

写真1	大川遺跡出土の銚帯金具	表紙
写真2	大川遺跡主要検出墓壇	3
写真3	大川遺跡検出のアイヌ文化期の 主要遺構と遺物	4
写真4	大川遺跡検出主要遺構・遺物(近世・近代)	5
写真5	大川遺跡出土の金属製品	10
写真6	大川遺跡出土の煙管	11
写真7	大川遺跡出土の銚先・垂飾・アベオブ	12
写真8	大川遺跡出土の古銭	12
写真9～12	金属製遺物の保存処理	16
写真13	大川遺跡G P - 2 出土人骨	24
写真14	貝塚サンプルの選別作業	25
写真15	大川遺跡出土の動物遺存体	27
写真16	大川遺跡出土の珠洲系摺鉢	36
写真17	大川遺跡出土の特異な陶磁器	37
写真18	目賀田帯刀両(北大図書館蔵)「蝦夷歴検図」	41
写真19	大川遺跡出土の骨角器	43
写真20	大川遺跡G P - 1 出土の蝦夷錦	46

図目次

図1	余市川と大川遺跡の位置	v
図2	1989年度大川遺跡 発掘調査区域とGrid配置	2
図3	縄文文化期と考えられる遺構の分布	6
図4	擦文文化期と考えられる遺構の分布	6
図5	アイヌ文化期(中世・近世)と 考えられる遺構の分布	7
図6	近世・近代と考えられる遺構の分布	7
図7	余市周辺地域の地質図	28
図8	余市川河口付近、本遺跡発掘区 周辺地域における深井戸地質柱状図	30
図9	余市地域における東西地質断面	31
図10	大川遺跡出土の骨角器と銚帯金具	44
図11	大川遺跡出土のマレク?とアベオブ	45
図12	大川遺跡G P - 1 検出状況	46

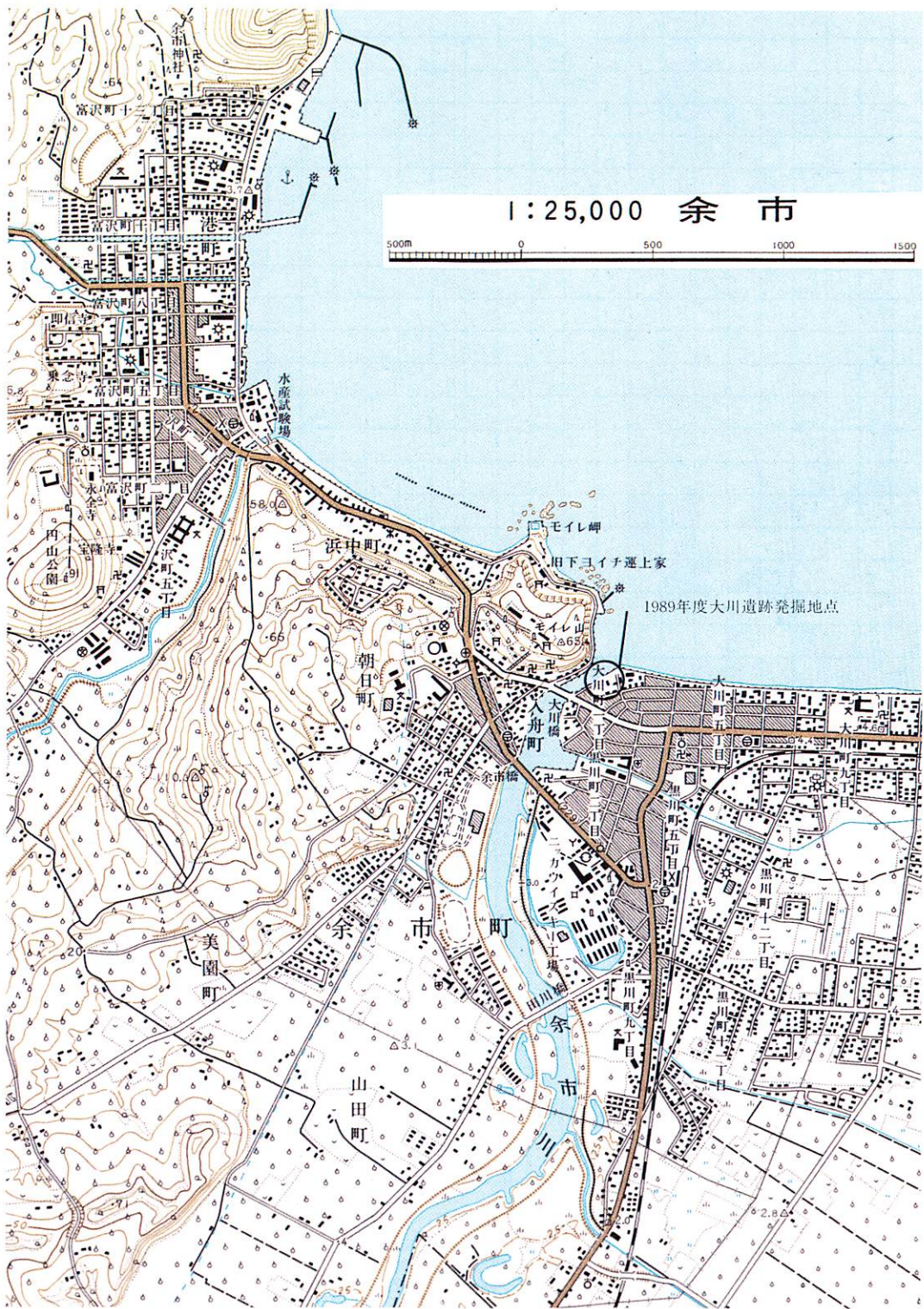


図1 余市川と大川遺跡の位置

I 遺跡の概要

a 大川遺跡の位置

図1・2に示したように今年度の調査対象区域は、余市川の河口部の最も北側部分にあたる。大川遺跡は道内においても、質・量ともに屈指の遺跡であることが山岸コレクション¹⁾、1958年の調査²⁾、余市水産博物館蔵資料他から知られているところである。

大川遺跡の範囲は、これまでの遺物出土地点等から、大川町1丁目・2丁目・3丁目に跨がり、概ね50,000m²を超える遺跡であると考えられる。今年度の発掘区域における遺構残存状況や包含層が比較的低いレベルで確認されていること等から、他の地点も比較的的良好に残されていると推察される。

1) 山岸玄津 1934『北海道余市貝塚に於ける土石器の考察』 茂山吟社

2) 名取武光・峰山 巖 1961『大川遺跡-余市町大川遺跡発掘報告書-』郷土研究 No.4

余市町教育委員会・余市町郷土研究会

b 標準層序と遺物包含層

図3～6にみられるように遺構が集中する台地上が大川砂丘³⁾の縁辺部と考えられる。砂丘上の標準層序は以下のとおりである。

I層 20～40cm 黒～黒褐色攪乱層（腐植土・粘土・褐色砂が混在、盛土部分を含む）

II層 20～40cm 黒色砂層（腐植土混じりの砂層）

III層 30～100cm 黒褐色砂層（腐植土が若干混じる砂層）

IV層 100cm以上 暗灰色ラミナと黄褐色砂の互層（パラレルラミナ層を形成）

数年前までは、発掘区全域に亘って建物が建っていたため、表土はかなり攪乱していた。したがって部分的にはII～IV層に深く攪乱が及んでいるところもあった。

遺物はI～III層に亘って出土した。IV層は無遺物層であり、本砂丘の基盤を形成するものとみられる。I層は攪乱層であることから、縄文文化期・擦文文化期・アイヌ文化期・近世・近代に亘る多時期の遺物が出土した。II層の出土遺物の主体は擦文文化期のものであるが、II層下部からは続縄文文化期、II層上部からはアイヌ文化期や近世・近代の遺物も少なからず出土した。III層の出土遺物の主体は続縄文文化期（後北C₂・D式）のものであるがIII層上部からは若干の擦文土器も出土している。

今年度の発掘区域のほとんど（約80%）は、海岸及び余市川に沿う砂丘以外の下の面である。この部分は侵食・二次堆積が顕著であったとみられ、多時期に亘る遺物が混在していた。（宮）

3) 久保武夫 1965『余市海岸の砂丘』『余市高校研究紀要』第2号

II 発掘調査の概要

a 調査方法

Grid 設定にあたっては、道々豊丘余市停車場線を基準として北東部と南西部の両地区に 5 m × 5 m のメッシュを組み本河川改修事業にかかわる発掘区全域をカバーした。今年度の発掘区域においては、北東から南西へ 7~20 の算用数字で北西から南東へ J~Z のアルファベットをもって表示した。Grid の呼称は図 2 のとおりである。

本遺跡は砂層によって形成されている上に、深いところでは 2 m 近く掘り下げる為に、発掘区の周囲を矢板で仕切った。これによって、隣接する家屋等への被害を未然に防止するとともに、発掘作業上の安全を確保することも可能となった。

遺構及び遺構に伴う遺物については、縮尺 $\frac{1}{10}$ ・ $\frac{1}{20}$ ・ $\frac{1}{50}$ 等で出土位置・レベル・種別等を記録し取り上げた。包含層出土の遺物については、I 層及び攪乱部分出土のものは Grid ごとに一括して取り上げ、II 層については主要遺物を、III 層については全出土遺物を縮尺 $\frac{1}{50}$ で図面化して取り上げた。写真撮影は、主要な遺構・遺物・調査状況・遺跡風景等についてのみ実施した。

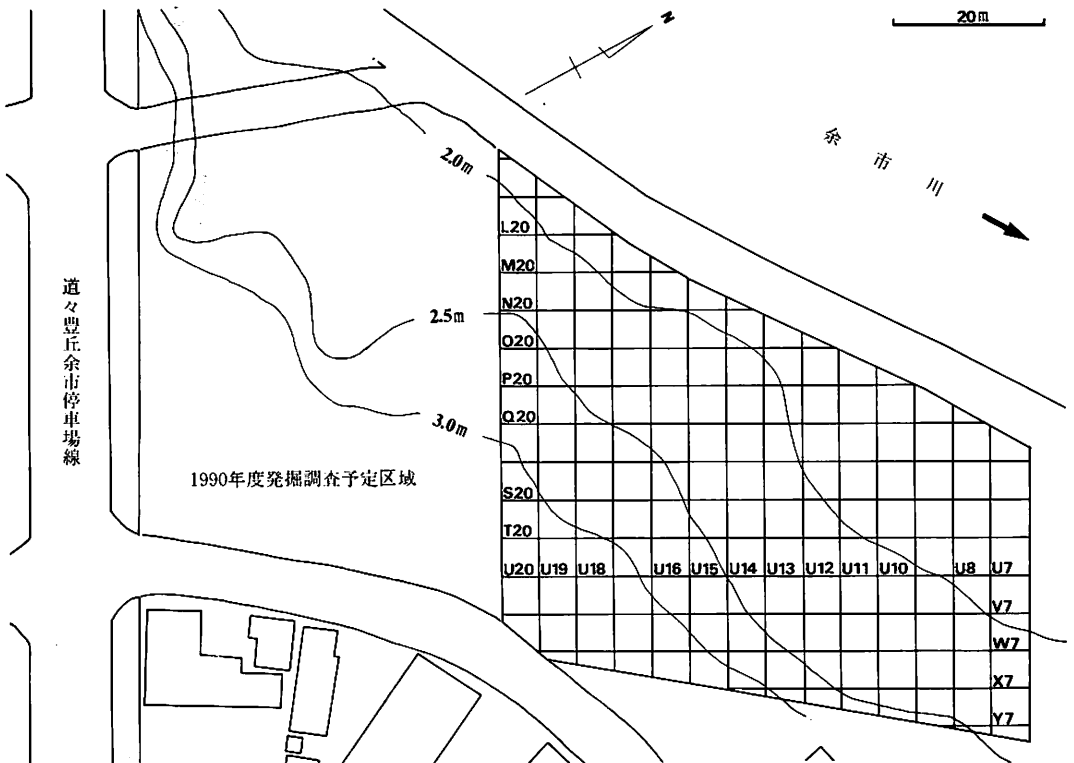


図 2 1989年度大川遺跡発掘調査区域とGrid配置



GP-1 検出状況(アイヌ文化期, 17~18世紀, 東頭位, 東側に墓標状のピットあり, 太刀・刀子・漆器・蝦夷錦等出土)



GP-2 検出状況(擦文文化期のものとみられる, 西頭位)



GP-7 検出状況(後北C₂・D式期, 5体合葬例, 東頭位, 覆土上部からも1体出土)



GP-8 検出状況(後北C₂・D式期, 東頭位)



GP-13 検出状況(後北C₂・D式期, 左が13a・右が13b, いずれも東頭位, 合葬例)

写真2 大川遺跡主要検出墓壇
 続縄文(後北C₂・D式)文化期,
 擦文文化期,
 近世アイヌ文化期



濠検出状況(MO-1左,MO-2右,同時併存とみられる,ほぼ南北に並列)



濠に伴なう柱穴(柵列?)検出状況



MO-1 セクション(第1号濠状遺構,チャシの濠とみられる,覆土中からは続縄文文化期~中世までの遺物が出土)



タシロ出土状況(T20Grid出土)



SM-3 検出状況(第3貝塚,北側より撮影)



SM-3貝の集中区検出状況(SM-3 東側部分,ウバガイ・サラガイ・コタマガイ等出土)



中柄出土状況(SM-3伴出,鯨骨製とみられる)



キテ出土状況(S18Grid,鹿角製,1層出土であるが貝塚に伴出していたものとみられる)

写真3 大川遺跡検出のアイヌ文化期の主要遺構と遺物



石組炉検出状況(6号石組炉・右・西, 7号石組炉・左・東)



石組炉検出状況(9号石組炉・奥・西, 10号石組炉 手前・東)



石組炉検出状況(14号石組炉・手前・南, 15号石組炉・奥・北)



石組炉検出状況(16号石組炉・手前・東, 17号石組炉・奥・西)



礎石検出状況(V19Grid・W19Grid周辺, 東から撮影)



礎石検出状況(V18Grid・W19Grid周辺, 南から撮影)

礎石検出状況(V18Grid・W18Grid周辺, 北から撮影)



礎石検出状況(V18Grid・W18Grid周辺, 北から撮影)



陶磁器出土状況(Y11Grid, 銚子・急須・土鍋等)

写真4 大川遺跡検出主要遺構・遺物
(近世・近代、礎石周辺は攪乱が多い)

b 検出遺構

1989年度の発掘調査区域において検出された遺構は、下記のとおりである。

住居址 5、墓塚 18、土塘 11、濠状遺構 2、溝状遺構 3、焼土（地床炉） 17、
貝塚 9、柱穴・杭穴状小ピット 116、礎石 63、石組炉 17、矢来等

近世・近代の遺構を除く続縄文文化期・擦文文化期・アイヌ文化期の各遺構（図3～6）は、
大川砂丘上にもみ分布する。貝塚（図5、SM-1～9）はSM-1を除き、砂丘縁辺部の傾斜
に残存していた。各時期・各遺構については図のとおりである。

図3 続縄文文化期と考えられる遺構の分布

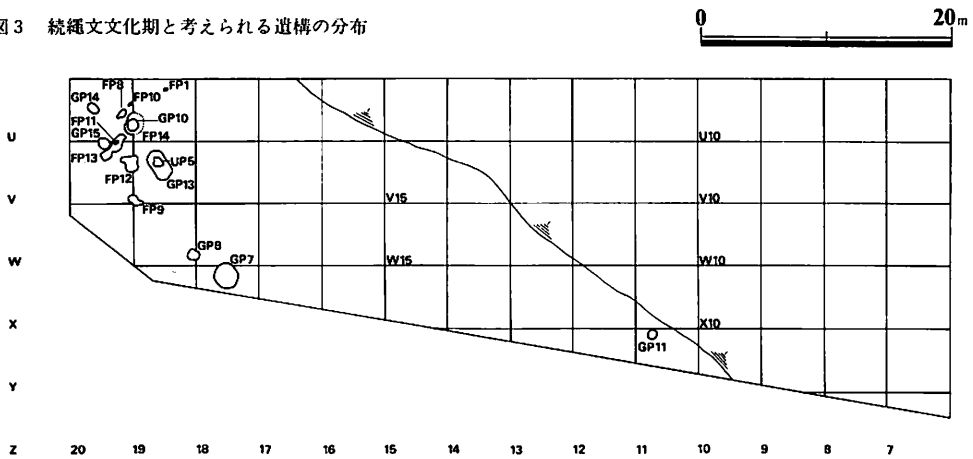


図4 擦文文化期と考えられる遺構の分布

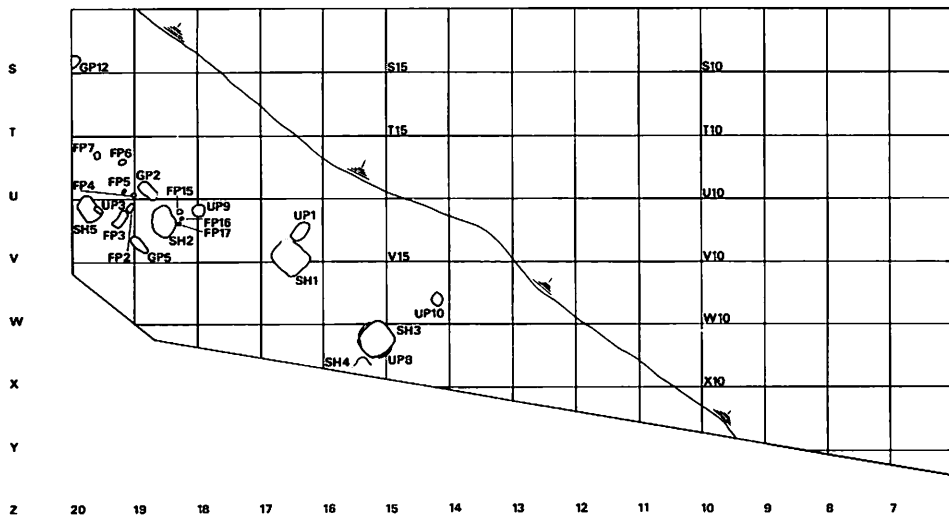


図5 アイヌ文化期(中世・近世)と考えられる遺構の分布

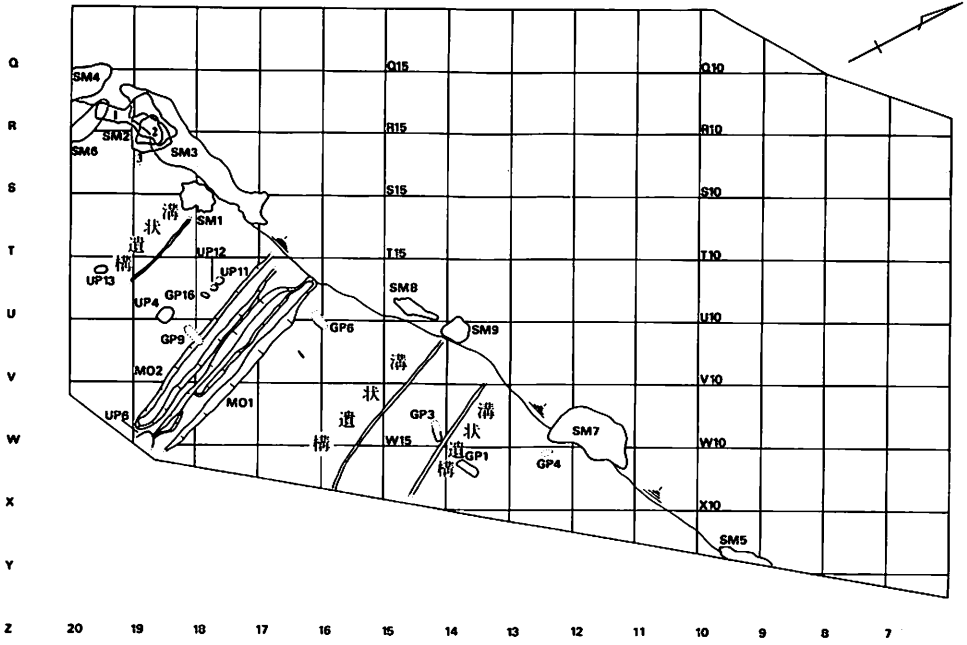
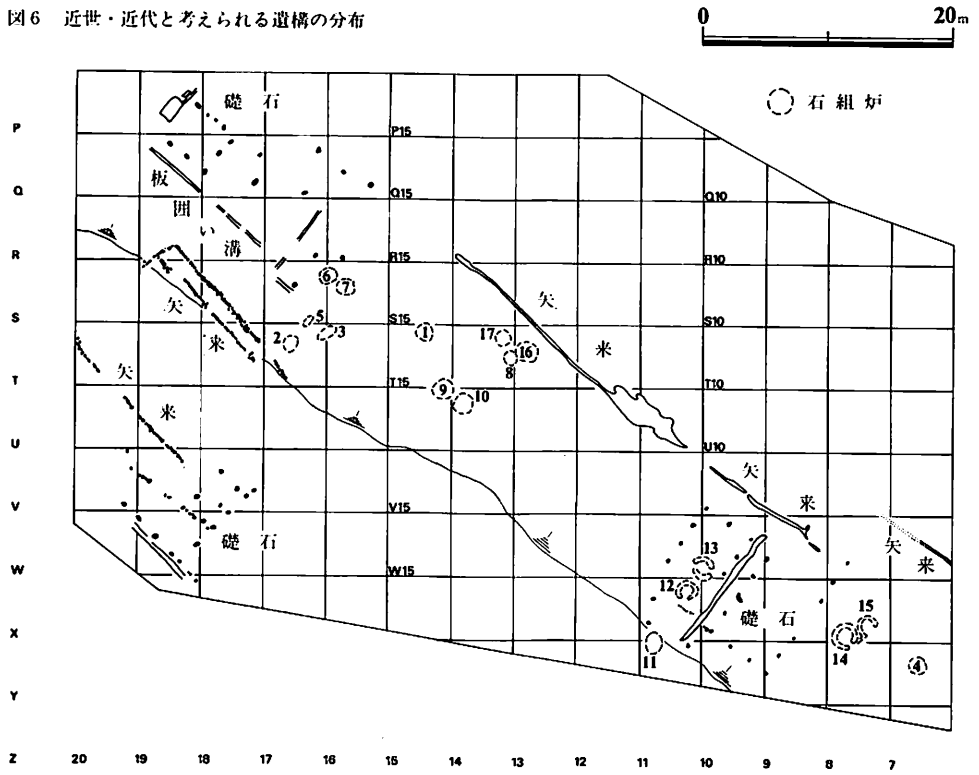


図6 近世・近代と考えられる遺構の分布



C 出土遺物

今年度の調査で出土した遺物は、多種多様・多時期に亘るものである。遺構及び包含層出土の遺物の集計については、9頁を参照願いたい。遺物整理がいまだ終了していないため70,000点あまりの遺物総数となっているが、貝塚（SM-2～9）については現在集計中であり最終的には100,000点を超えることは確実である。

土器としては、網文、大谷地、手稲砂山（ニセコ）、入江、船泊上層（ウサクマイC）、鯉淵、御殿山、大洞BC、上ノ国、大洞C₁・C₂（桃内）、大洞A・A'、恵山、赤穴、後北B・C₁・C₂・D、北大I～III、土師、擦文、須恵、内耳土器等が出土したが、出土土器の90%以上が後北C₂・D式と擦文土器によって占められる。他の土器は各々1点からせいぜい数十点程度の出土であった。

土製品としては、土製円板、紡錘車、鞆羽口、土錘、泥面子等がある。

石器としては、石鎌、石槍、搔器、削器、柄付ナイフ、ノッチド・スクレイパー、石斧、砥石、矢柄研磨器、石錘、敲石、凹石、台石、石臼、茶臼等が出土した。

石製品としては、玉（蛇紋岩他多数）、火皿（アペオプ、写真7）、垂飾（有孔石製品）等が出土した。

骨角器としては、回転式銚先（キテ、写真7）、中柄（マカニツ、写真19）、骨斧（ポンネムカラ、写真19）、骨篋（ボネベラ）、骨針（チンベ、写真19）、針入れ（チシポ、写真19）、鏝（セツパ、写真19）、垂飾（有孔のクマの犬歯、写真7）等が出土した。

金属製品としては、回転式銚先（写真7）、箆（フネ、銅鎌（フレカニルイ、写真5）、角鋸、平鋸、和釘（カネクンキ）、内耳鉄鍋（一文字湯口・丸型湯口）、吊耳鉄鍋、爛鍋、鍋鉉（スアツツ）、鉤（マレク、写真5）、釣針、針（ケム、写真19）、槍先、鉄斧、鏝（セツパ）、太刀、小刀（マキリ、写真5）、山刀（タシロ）、鈍、矢筒（イカヨフ）の飾り金具（トンビ）、煙管（キセリ、写真6）、鉄環、腕輪（テクンカニ、写真5）耳飾り（ニンカリ、写真5）、筭、兵庫鎖（写真5）、石突（写真5）、燭台、鎌、古銭（13頁参照、写真8）、銚帯金具（Vb・VI参照、表紙）等が出土した。

木製品としては、漆器椀（イタンキ、写真3・GP-1）、漆器膳（オッチケ、写真3・GP-1）等が出土した。

約25,000点出土した陶磁器類（Va参照、写真16・17）をはじめ、夥しい数の植物遺存体（IVa参照）、動物遺存体（IVd参照）、蝦夷錦、櫛、硯、石盤、蠟石、ガラス玉、ガラス製品、鉄滓、剥片、石核、礫等が出土した。（宮）

1989年度 大川遺跡出土遺物一覧

〈遺構出土遺物一覧〉

		GP1~16	SH1~5	¹⁾ UP1~13	FP1~17	SM1~9	MO1・2	溝状1~3	SP1~116	計
土 器		273	197	120	212	697	407	13	52	1,971
土 製 品		1	0	4	1	1	2	0	0	9
石 器		8	3	2	3	13	4	0	0	33
石製品	³⁾ 玉	67	0	0	3	10	0	0	0	80
	他	0	1	0	0	1	0	0	0	2
骨 角 器		0	0	0	0	22	0	0	0	22
金属製品	古銭	0	0	0	0	9	1	0	0	10
	他	74	35	54	90	395	24	2	6	680
木 製 品		20	0	13	0	3	1	0	3	40
陶 磁 器		0	0	2	3	102	16	0	0	123
剥 片		111	73	32	92	88	49	1	10	456
礫		36	3	16	3	35	17	0	25	135
動物遺存体	骨	44	6	2	0	346	8	0	1	407
	貝	1	3	2	7	²⁾ 5,222	2	0	1	5,238
植物遺存体		4	2	6	5	2	0	0	0	19
そ の 他		4	0	1	0	12	4	0	1	22
計		643	323	254	419	6,958	535	16	99	9,247

1) UP-2・7は欠番 2) 整理途中なのでSM-1のみ記載 3) 玉のうち69点はガラス玉

〈遺構外出土遺物一覧〉

		I 層	II 層	III 層	計
土 器		9,031	9,476	1,548	20,055
土 製 品		15	27	2	44
石 器		194	67	26	287
石製品	⁴⁾ 玉	17	8	0	25
	他	5	0	0	5
骨 角 器		21	4	5	30
金属製品	古銭	156	42	1	199
	他	453	509	10	972
木 製 品		38	20	3	61

		I 層	II 層	III 層	計
陶 磁 器		23,265	1,328	88	24,681
剥 片		1,320	1,349	238	2,907
礫		115	102	14	231
動物遺存体	骨	1,198	357	11	1,566
	貝	7,913	617	364	8,894
植物遺存体		33	73	1	107
そ の 他		79	63	17	159
計		43,853	14,042	2,328	60,223

4) 玉のうち22点はガラス玉

※なお、この集計は1月20日までのものである。

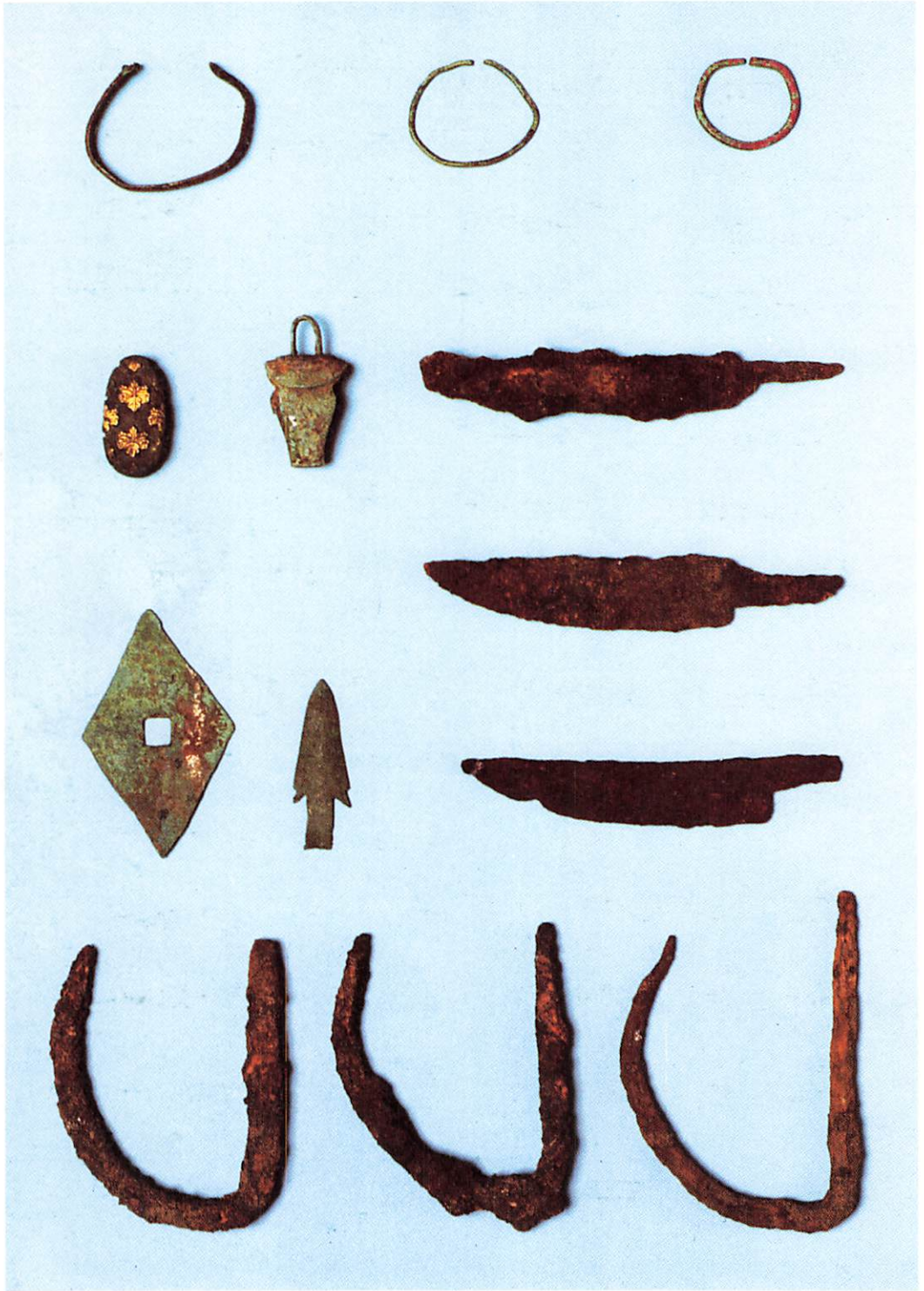


写真5 大川遺跡出土の金属製品



写真6 大川遺跡出土の煙管

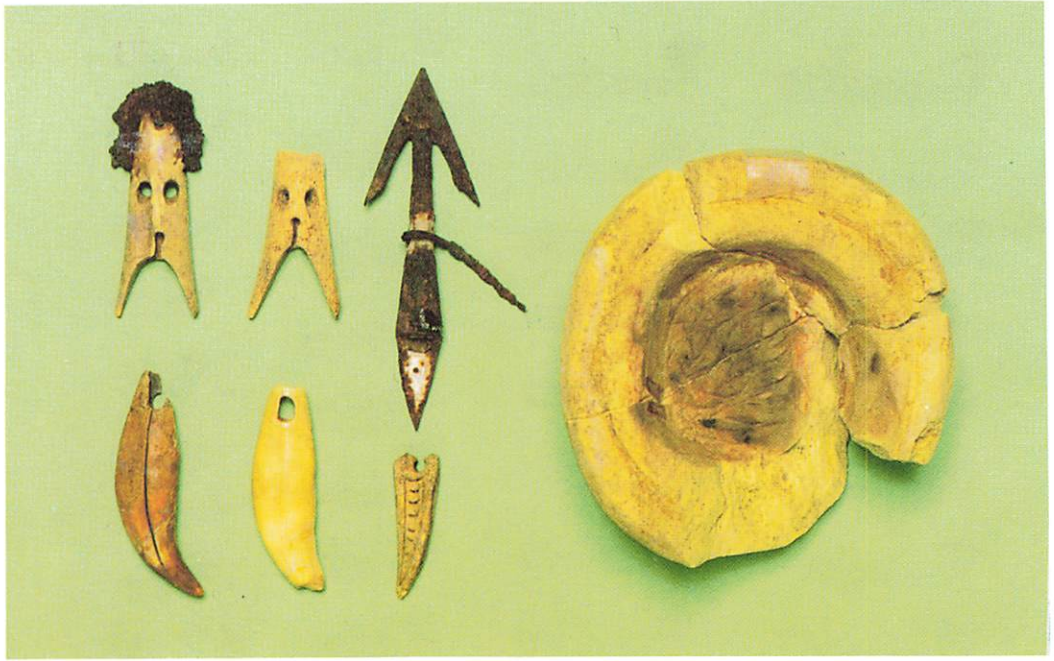


写真7 大川遺跡出土の括先・垂飾・アベオブ

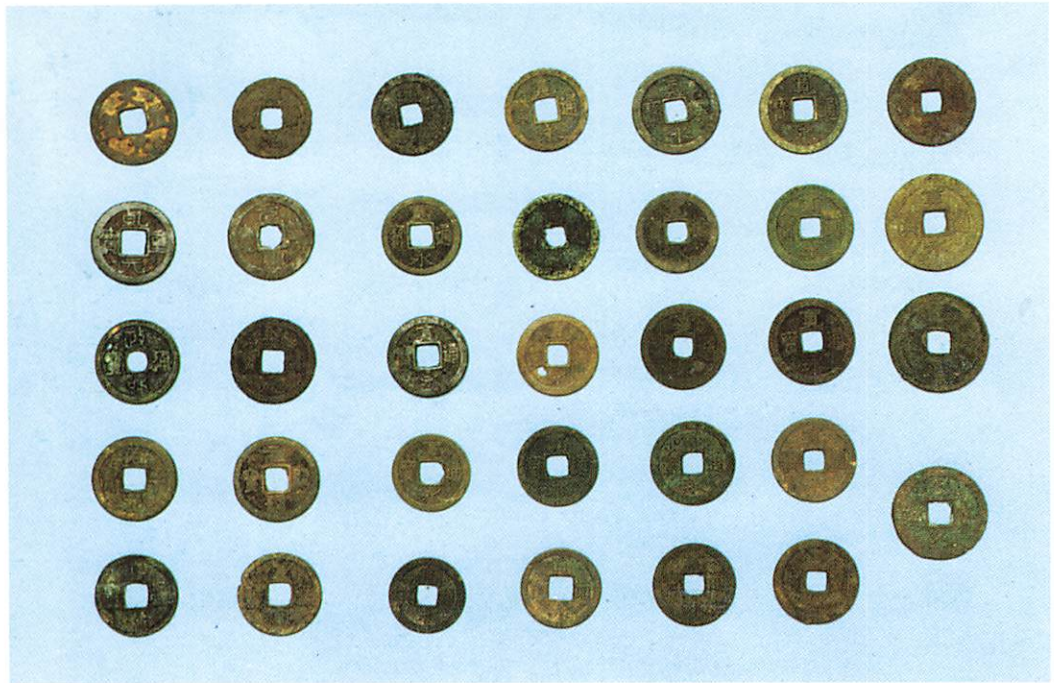


写真8 大川遺跡出土の古銭

大川遺跡出土古銭一覧

〈遺構出土穴銭類〉

遺構名	渡 来 銭			寛永通宝 (1626~1869)	不明銭	計	備 考
	貞元重宝 (753唐)	元符通宝 (1098~1100北宋)	聖宋元宝 (1101北宋)				
SM-1	0	0	0	1	0	1	寛永通宝の背文は文(1668年)
SM-2①	0	0	0	3	1	4	不明銭は鉄銭
SM-3	1	0	0	1	0	2	寛永通宝の背文は足(1741年)
SM-4	0	1	1	0	0	2	
MO-1	0	0	0	0	1	1	
計	1	1	1	5	2	10	

※SM-2の①は第1貝層

〈遺構外出土穴銭類〉

古 銭 名	鑄造年	時代	I層	II層	計	備考	
渡 来 銭	祥符元宝	1008	北宋	1	0	1	
	天聖元宝	1023	北宋	0	2	2	
	皇祐通宝	1039	北宋	2	0	2	
	嘉祐通宝	1056~1063	北宋	1	0	1	
	治平元宝	1064~1067	北宋	1	0	1	
	熙寧元宝	1068	北宋	0	1	1	
	元符通宝	1098~1100	北宋	1	1	2	*
	政和通宝	1111	北宋	1	0	1	

古 銭 名	鑄造年	時代	I層	II層	計	備考
寛永通宝	1626~1869	江戸	72	15	87	**
文久永宝	1863	江戸	2	1	3	
不明銭			5	2	7	
計			86	22	108	

※元符通宝(I層)は元祐通宝(1086北宋)とも考えられる
 ※※寛永通宝の背文は、文(4枚)、小、元、足(各1枚)がみられる

〈遺構外出土近代硬貨〉

硬貨名	期間	I層	II層	III層	計	備考
竜20銭銀貨	明6~明38	1	0	0	1	S11. 明32年
竜10銭銀貨	明6~明39	1	0	0	1	Q19. 明20年
菊5銭白銅貨	明22~明30	1	0	0	1	S14. 明29年
稲5銭白銅貨	明30~明38	1	0	0	1	W19. 明38年
2銭銅貨	明6~明17	6	1	0	7	
竜1銭銅貨	明6~明21	12	13	0	25	明10年が多い
半銭銅貨	明6~明21	10	4	0	14	
桐1銭青銅貨	大5~昭13	26	1	0	27	大9年が多い
小型50銭黄銅貨	昭22~昭23	2	0	0	2	R7. Q17 昭22年

硬貨名	期間	I層	II層	III層	計	備考
10銭錫貨	昭19	1	1	0	2	V9I. V19II
5銭アルミ貨	昭15~昭18	2	0	0	2	S16. 昭15年 X9. 昭16年
鳩5銭錫貨	昭20~昭21	0	1	0	1	T16. 昭20年
烏1銭アルミ貨	昭13~昭15	1	0	0	1	V18
富士1銭アルミ貨	昭16~昭18	1	0	0	1	V11. 昭16年
1銭錫貨	昭19~昭20	0	0	1	1	U17. 昭19年
不明貨幣		4	0	0	4	
計		69	21	1	91	

III 出土遺物の保存処理方法とその進行状況

a 骨角器・動物遺存体の保存処理

1989年度、大川遺跡からは骨角器52点・動物遺存体約1,600点(1990年1月20日現在)が出土している。現在、43点の保存処理を完了し、46点は処理中である。今後の処理の予定として、骨角器はすべて行い、貝類や獣骨などの動物遺存体に関しては、標本となる資料を中心に約1,000点の処理を行う予定である。これらの成果に関しては今後の資料の集積を待ち、改めて報告したい。

〈保存処理の必要性〉

土壌中における骨類は、緩やかな分解・変質を繰り返すが、一度、発掘調査によって外界の大気にふれると急激な物理変化をおこす。その結果として変色したり、骨の表面が剥離したりする。これは、日本の土壌が一部を除いて酸性であり、骨の保存には適さないことによる。したがって、骨角器や動物遺存体は、貝塚などを除き、脆弱化していることが多い。

保存処理は、このような遺物が、それ以上、悪化した状態にならないために行う科学的な処理である。

〈遺物の取り上げと処理工程〉

保存処理の工程は、15頁のとおりであり、1サイクルに約1カ月必要となる。現在、保存処理を行う遺物は、試験的な段階であるため出土状態の悪いものを除いて水洗後に行っている。本来は取り上げ後、すぐに行うのが望ましいが、それでもかなりの効果がみられる。また各工程で使用した溶液は再利用が可能であるが、その場合、揮発分を加える必要がある。

発掘時に取り上げのできない程、状態の悪い骨については、パラロイドB-72の10~30%アセトン溶液で直接固めた。これは、取り上げ後に表の工程によって処理していくが、取り上げの際はガーゼに包み、そのままケース(シャーレ・タッパーを使用)に移し、アセトンを使用する段階で骨についた土を筆などで落していくとよい。次のパラロイドの溶液を作る場合、完全に溶けるまでに半日~1日(温度差による)を要するため、なるべく含浸の前日に行うようにしている。

保存処理の作業を進めていくうえで、工程ごとに注意すべき点については含浸時の薬品が揮発したり、パラロイド溶液の段階では、樹脂が底に沈澱することがあるので、常に均一に保つことが必要である。薬品の取り扱いと保管に関しても十分に注意すべきである。現在、保存処理作業の部屋と薬品保管の部屋に関しては使用時以外、施錠している。また、作業の部屋については、換気扇とサーキュレーターを取り付け、換気に気を配っている。

最後になったが、保存処理の工程に関して札幌医科大学の大島直行氏に種々の御教示をいただき、感謝の意を表する次第である。

(高田)

動物遺存体の保存処理工程

1. 脱水

- | | |
|-----------------|--------|
| ①エタノール40%水溶液に含浸 | (2～3日) |
| ②エタノール60%水溶液に含浸 | (2～3日) |
| ③エタノール80%水溶液に含浸 | (2～3日) |
| ④エタノール90%水溶液に含浸 | (2～3日) |
| ⑤エタノール100%に含浸 | (3日) |
| ⑥エタノール100%に含浸 | (2日) |
| ⑦エタノール100%に含浸 | (1日) |

2. エタノールをアセトンに置換

- | | |
|--------------------|--------|
| ①アセトン40%エタノール溶液に含浸 | (2～3日) |
| ②アセトン60%エタノール溶液に含浸 | (2～3日) |
| ③アセトン80%エタノール溶液に含浸 | (2～3日) |
| ④アセトン90%エタノール溶液に含浸 | (2～3日) |
| ⑤アセトン100%に含浸 | (3日) |
| ⑥アセトン100%に含浸 | (2日) |
| ⑦アセトン100%に含浸 | (1日) |

3. 強化

パラロイドB-72^{*}、10%～25%アセトン溶液に含浸(3～7日)

- 状態の良いもの 10%～15%
- 状態の良くないもの 20%～25%

4. 乾燥

金網の上へのせ、陰干しにして完全に乾かす。

5. 表面処理

表面の光沢を押さえるときはアセトンで拭く。

※アクリル系合成樹脂

b 金属製遺物の保存処理

〈保存処理の工程〉

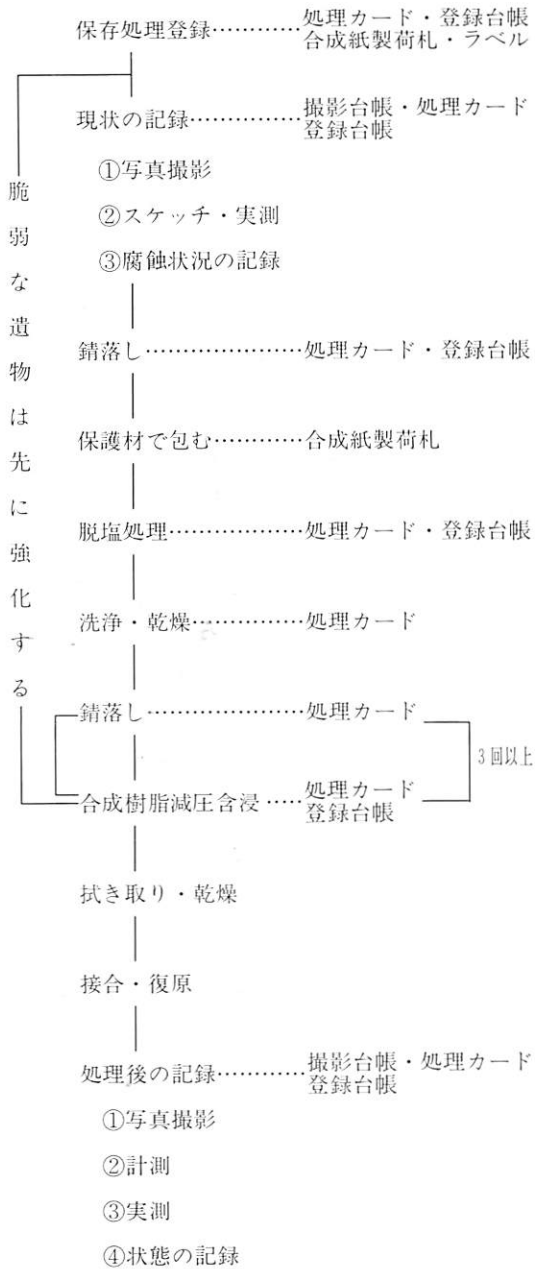


写真9

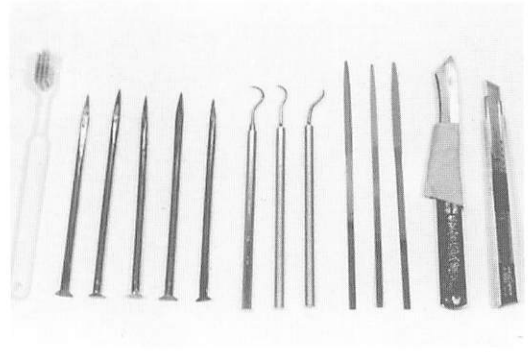


写真10

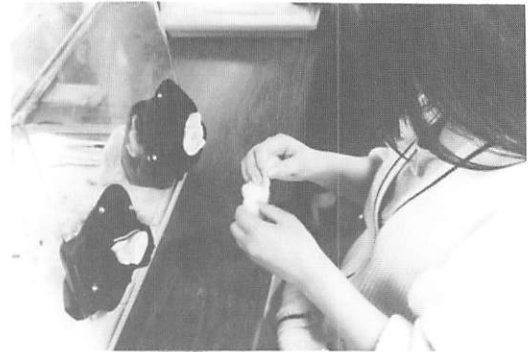


写真11

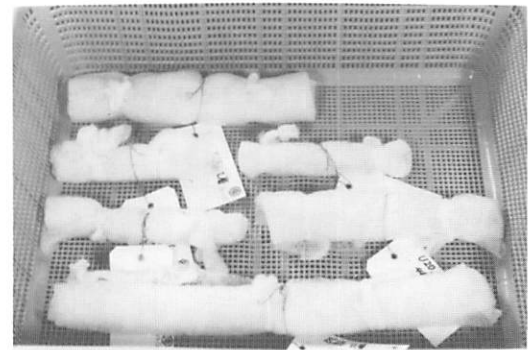


写真12

今年度出土した金属製遺物は、古銭を除き1542点（遺構内出土570点、遺構外出土972点）を数える。これらのうち、1月20日までに保存処理登録された460点（破片などでは787点）について保存処理を行っている。今のところ、現状の記録と錆落とし作業が中心であり、脱塩処理中のものは37点である。現在、遺構内出土遺物から作業を進めており、大半の遺物はエタノールに漬けて保管している。保存処理にあたっては、①現状よりも状態を悪化させない、②遺物の状況に応じた処理を行う、③できる限り可逆性のある方法や材料を用いる、という3点に留意している。未だ形になる成果は上っていないが、現在行っている方法と今後の展望について述べてみたい。

保存処理の基本工程

保存処理登録 保存処理を要する遺物を台帳に登録すると共に、個々の遺物について保存処理カードを作成して遺物に対して行った処理を記録している。個々の遺物には、油性マジックで遺物番号・名称などを記入した合成紙製荷札をつけている。これらをビニール袋に入れ、現状の記録と錆落としに要する日数を記したラベルを貼っている。この日数を作業計画を立てる上での目安にしている。

現状の記録 保存処理を行うことによって現状が著しく変わることもあるため、写真とスケッチで記録している。スケッチは保存処理カードに行き、腐食の状況、錆落としの程度、保存処理の方針などを記述している。一部の遺物については実測を行っている。

錆落とし 保存という面からは、できる限り錆を落した方がよいのだが、考古資料の面から考えて、形状を著しく変形させている錆や表面の進行性の赤錆だけを落とすようにしている。遺物の状態によっては錆落としをしないものもある。どの程度の錆落としが適切であるかは今後の課題であり、当面は錆を落とし過ぎないように脱塩前と脱塩後、強化と強化の合い間と、段階的に錆落としを行う予定である。錆落としの道具としては、五寸釘を鋭く削ったもの・スケーラー（歯科用器具）・小さなヤスリ・カッター・肥後守など（写真10）を用いている。錆落とし作業に伴って相当の粉塵が生じるため、プラスチック製の飼育ケース（写真9）や透明アクリル板・不織布・腕抜きなどで作業ボックスを製作した。また、ハンディタイプの精密電動工具の使用も検討中である。

脱塩処理 鉄製遺物は水酸化ナトリウム1～2%水溶液に長期間浸漬する方法をとっている。比較検討のため1%水溶液と2%水溶液に漬けているものがある。浸漬期間は6ヵ月ほどを考えている。銅など非鉄製遺物は、セスキ炭酸ナトリウム5%水溶液に6ヵ月ほど浸漬する方法を考えている。これらの%と浸漬期間については検討中である。脱塩後は、純水あるいは蒸留水で水酸化ナトリウムを洗い流した後、同様の水に漬け、さらにエタノールによる流し洗いと浸漬により脱水し、また、脱塩処理中の損傷などを防ぐため、事前に不織布で遺物を包んでいる。（写真11・12）

強化 鉄製遺物についてはパラロイドNAD-10の30%アセトン溶液による真空度20～40mmHg程

度の減圧含浸を考えている。含浸・拭き取り・乾燥・錆落とし、というサイクルを2～3回繰り返す。非鉄製遺物についてはパラロイドB-72：8.5g・ベンゾトリアゾール：1.5g・トルエン：250ml、アセトン50mlの割合で調合した溶液による減圧含浸とベンゾトリアゾール入りのアクリル系合成樹脂（インクラック）の塗布を考えている。木質部にはイソシアネート系合成樹脂（サンコールS K50）を事前に塗布し強化した後、減圧含浸を行う。減圧装置については、デシケーターを検討中である。

補修・復原 現在、仮の処置のためセメダインCで接合してあるが、保存処理後は可能な限り接合・復原を行っていく。その際、着脱する必要性の有無に応じて、セルロース系の接着剤とエポキシ系の接着剤を使い分けていく。復原には、マイクロバルーンを混入した補填剤を使用する。

最後になりましたが、保存処理に関して多くの方々に御教示をいただき、感謝の意を表する次第です。
（鎌田）

出土地点・種類別保存処理登録一覧（1月20日現在）

		SM	SH	MO	GP	UP	遺構外	合計
鉄 製 遺 物	刀剣・刀子類	25(29)	——	1	7(11)	——	74(77)	107(118)
	斧	2	——	——	——	——	2	4
	鎌	2	——	——	——	——	7	9
	刺突具類	4	——	——	——	——	5(6)	9(10)
	鉄鍋類	23(175)	1	5(23)	——	3(4)	81(126)	113(329)
	釘	50(121)	2	1	——	2	49(64)	104(190)
	鋸	2	——	——	——	——	2	4
	鉤類	3	——	——	——	——	6	9
	釣針	1(4)	——	1	——	——	——	2(5)
	針	——	——	——	——	——	1	1
	輪鎖類	——	——	——	——	——	7(8)	7(8)
	鋏	1	——	——	——	——	2	3
	その他	鉄鋏1	——	——	——	——	39(47)	10
	不明品	17(22)	——	——	2	——	9	58(71)
非鉄金属製遺物		2	——	——	——	——	13(14)	15(16)
合計		133(368)	3	8(26)	9(13)	5(6)	297(371)	455(787)

※（ ）内は破片数、釘については一括出土が多いため本数。点数と破片数が同一の場合には特に明示していない。

IV 分析の概要

a 大川遺跡出土の炭化種子予備分析結果

吉崎 昌一 (北海道大学文学部)

<p>SH-1 (LF)</p> <p>アワ <i>Setaria italica</i>(L.) P. Beauv.</p> <p>イヌビエ <i>Echinochloa crus-galli</i> Beauv. 類似のもの (ヒエ <i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno である可能性もある)</p>	<p>FP-9</p> <p>ソバ <i>Fagopyrum esculentum</i> Moench クルミ</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. </p>
<p>SH-1 (床)</p> <p>コメ <i>Oryza sativa japonicum</i> クルミ</p> <p>アワ <i>Setaria italica</i> (L.) P. Beauv. </p> <p>ヒエ <i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno </p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. </p> <p>クルミ </p>	<p>FP-10</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. ブドウ</p> <p>FP-11</p> <p>アワ <i>Setaria italica</i> (L.) P. Beauv. クルミ</p> <p>コメ <i>Oryza sativa japonicum</i> </p> <p>ソバ <i>Fagopyrum esculentum</i> Moench </p>
<p>SH-3</p> <p>コメ <i>Oryza sativa japonicum</i> クルミ</p> <p>ソバ <i>Fagopyrum esculentum</i> Moench ブドウ</p> <p>ヒエ <i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno ミズキ</p> <p>アワ <i>Setaria italica</i> (L.) P. Beauv. ウルシ</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. </p>	<p>FP-12</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. クルミ</p> <p>FP-13</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. クルミ</p> <p>コメ <i>Oryza sativa japonicum</i> ブドウ</p> <p>FP-14</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. クルミ</p>
<p>SH-4</p> <p>ヒエ <i>Echinochloa utilis ohwi et Yabuno</i> ブドウ</p> <p>キビ <i>Panicum miliaceum</i> L. ウルシ</p>	<p>FP-15</p> <p>キハダ </p>
<p>SH-5</p> <p>コメ <i>Oryza sativa japonicum</i> クルミ</p> <p>オオムギ <i>Hordeum vulgare</i> L. ? </p>	<p>ブドウ </p>

第一次種子分析データは以上のとおりである。雑草種子および電子顕微鏡写真については目下進行中である。SH-3の出土状況がもっとも良好であるが、事は重大なので慎重に検討しなければならないと考えられる。コメは相当量出土しているが、出土状況から言えば、北海道ではもっとも多いと言える。

b 大川遺跡出土の花粉分析結果概要報告

五十嵐八枝子・ジオサイエンス(株)

分析方法 試料は砂および砂に含まれる炭質物であることから、花粉の含有量は少ないとみられるため各試料500 gを次の方法に従い処理した。

- 1) KOH 10%溶液を加え24時間おく。
 - 2) これに蒸留水を加え、1日に1度上澄液を傾斜法によりすてる操作を約10日間くりかえす。
 - 3) 試料中の水を除き、HFを加え24時間おく。
 - 4) ZnCl₂の飽和液を加え、1時間遠心分離器により分離する。
 - 5) アセトリシス法を行う。
- 以上の各処理の間は、3回ずつ蒸留水による水洗をおこなう。

処理後の試料は各10枚ずつ薄片をつくり、400倍の光学顕微鏡により同定した。各試料につき、樹木花粉のみ200個を同定することを目指したが、花粉の含まれ方が少なく樹木・草木・シダをあわせて200個に達しない試料もあった。

花粉群集の特徴 II層・III層・IV層ともに、海岸砂地に生える塩生植物のイネ科（ヤマアワ・ハマニンニクなど）とアカザ科（アッケシソウなど）が高率に産出する。ほかにII層ではモミ属（トドマツ）、アブラナ科（ハマハタザオなど）、ゴマノハグサ科（ウンランなど）、タンポポ亜科が比較的多い。III層ではタンポポ亜科・ゼンマイ科のシダが比較的多い。IV層ではコナラ属・ハンノキ属・ニレ属などの広葉樹が他に比べ若干多く含まれる。

II層U17 Grid

トウヒ属	25	6.6
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属 (トドマツ)	51	13.6
マツ属 (ハイマツ)	17	4.5
クルミ属	1	0.3
コナラ属	3	0.8
ハンノキ属	8	2.1
カバノキ属	2	0.5
ニレ属	2	0.5
シナノキ属	2	0.5
アカザ科	117	31.1
セリ科	2	0.5
キク亜科	7	1.9
タンポポ亜科	4	1.1
ヨモギ属	11	2.9
アブラナ科	1	0.3
ナデシコ科	7	1.9
イネ科	101	26.9
カヤツリグサ科	11	2.9
ゼンマイ科	4	1.1
合 計	376	100%

II層W20 Grid

トウヒ属	8	3.6
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属 (トドマツ)	18	8.1
マツ属 (ハイマツ)	2	0.9
コナラ属	1	0.5
ハンノキ属	7	3.1
カバノキ属	2	0.9
ニレ属	2	0.9
クルミ属	1	0.5
シナノキ属	3	1.3
ウコギ科	2	0.6
トネリコ属	1	0.5
アカザ科	57	25.6
セリ科	1	0.5
キク亜科	2	0.9
タンポポ亜科	19	8.5
ヨモギ属	11	4.9
キンポウゲ科	1	0.5
ナデシコ科	4	1.8
アブラナ科	15	6.7
シソ科	1	0.5
ゴマノハグサ科	10	4.5
カラマツソウ属	1	0.5
アカバナ属	1	0.5
アカネ科	2	0.9
イネ科	41	18.4
カヤツリグサ科	10	4.5
合 計	223	100.1%

III層上部U17 Grid

トウヒ属	7	2.2
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属(トドマツ)	25	7.5
マツ属(ハイマツ)	13	3.9
コナラ属	8	2.4
ハンノキ属	19	5.7
カバノキ属	9	2.7
ニレ属	6	1.8
クルミ属	5	1.5
ハシバミ属	1	0.3
シナノキ属	2	0.6
ウコギ科	2	0.6
アカザ科	44	13.3
セリ科	7	2.1
キク亜科	9	2.7
タンポポ亜科	27	8.1
ヨモギ属	8	2.4
キンポウゲ科	6	1.8
ナデシコ科	3	0.9
イネ科	122	36.7
イネ科(大型)	2	0.6
ウラボシ科	4	1.2
ゼンマイ科	3	0.9
合 計	332	99.8%

III層上部W20 Grid

トウヒ属	2	0.9
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属(トドマツ)	15	6.9
マツ属(ハイマツ)	2	0.9
コナラ属	3	1.4
ハンノキ属	6	2.8
カバノキ属	4	1.9
ニレ属	1	0.5
クルミ属	3	1.4
シナノキ属	1	0.5
ウコギ科	1	0.5
アカザ科	33	15.3
キク亜科	3	1.4
タンポポ亜科	5	2.3
ヨモギ属	4	1.9
アブラナ科	1	0.5
ナデシコ科	1	0.5
アカネ科	1	0.5
イネ科	118	54.6
カヤツリグサ科	2	0.9
ゼンマイ科	10	4.6
合 計	216	100.2%

III層中部W13 Grid

トウヒ属	4	2.6
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属(トドマツ)	8	5.2
マツ属(ハイマツ)	1	0.6
コナラ属	3	1.9
ハンノキ属	5	3.2
カバノキ属	2	1.3
ニレ属	2	1.3
クマシテ属	1	0.6
ウコギ科	1	0.6
アカザ科	61	39.4
セリ科	2	1.3
キク亜科	4	2.6
タンポポ亜科	20	12.9
ヨモギ属	5	3.2
アブラナ科	1	0.6
キンポウゲ科	1	0.6
ミチヤナギ属	1	0.6
イネ科	20	12.9
カヤツリグサ科	1	0.6
ウラボシ科	4	2.6
ゼンマイ科	4	2.6
ヒカゲノカズラ属	4	2.6
合 計	155	99.8%

IV層上部U17 Grid

トウヒ属	4	1.6
(エゾマツ・アカエゾマツ)		
モミ属(トドマツ)	4	1.6
マツ属(ハイマツ)	2	0.8
コナラ属	18	7.4
ハンノキ属	36	14.8
カバノキ属	7	2.9
ニレ属	10	4.1
クルミ属	4	1.6
クマシテ属	1	0.4
シナノキ属	1	0.4
クリ属	1	0.4
カエデ属	1	0.4
アカザ科	54	22.2
セリ科	2	0.8
キク亜科	14	5.8
タンポポ亜科	27	11.1
ヨモギ属	2	0.8
アブラナ科	1	0.4
キンポウゲ科	8	3.3
ギンギン属	7	2.9
アブラナ科	2	0.8
ナデシコ科	1	0.4
アカネ科	1	0.4
オオバコ属	4	1.6
ユリ科	2	0.8
イネ科	16	6.6
カヤツリグサ科	8	3.3
ウラボシ科	1	0.4
ゼンマイ科	1	0.4
ヒカゲノカズラ属	4	1.6
合 計	244	99.6%

c 大川遺跡GP-2出土の人骨について

石田 肇・松村 博文・大島 直行（札幌医科大学）

北海道余市町大川遺跡から擦文時代に属すると思われる人骨が一体分発見された。出土した人骨の部位は頭骨・歯・椎骨および四肢骨である。これらの保存状態は骨表面が剥離した部位が多く良好とはいえない。歯については歯冠が比較的良好に保存されている。頭蓋骨および歯のそれぞれについての人類学的観察をおこなったので、その所見を報告する。

年齢・性別 頭蓋骨の主縫合は内外板ともに全く癒合は認められないが、蝶後頭軟骨結合はすでに完全に骨に癒合している。歯は、第3大臼歯が上下左右の4本とも萌出しており、32本総ての歯がそろっている。咬耗は、いずれの歯も1度程度である。これらのことから判断すると、この個体は成人であるが比較的若く、20歳代の段階にあるといえる。

頭蓋骨は全体として小さく、前頭結節がよく発達し、乳様突起の小さいことなどから考えて、この個体の性別は明らかに女性と判定される。

1) 頭蓋骨（写真13）

保存状態 脳頭蓋は比較的良好に残存し三主径が計測可能である。顔面頭蓋は残念ながら腐食した木のようにもろく鼻骨・頬骨および上顎骨の歯槽突起部が残るのみである。下顎骨は下顎枝の一部を除き保存は良好である。

形質 頭蓋の計測値および形態小変異の有無については以下の表1および2に示す。

脳頭蓋は長幅示数80.5と短頭型に属し、バジオン・プレグマ高は120mmで低い。前頭結節および頭頂結節が発達するが、側頭線、上・下項線等の筋付着部の発達は良くない。外後頭隆起もほとんど認められな

表1 頭蓋骨計測値

計測項目	
1. 頭蓋最大長	174mm
5. 頭蓋基底長	85mm
8. 頭蓋最大幅	140mm
8 : 1	80.5
17. バジオン・プレグマ高	120mm
17 : 1	69.0
17 : 8	85.7
51. 眼窩幅	37mm

表2 頭蓋形態小変異

項目	右	正中	左
前頭縫合		0	
ラムダ小骨		0	
インカ骨		0	
横後頭縫合残存	0		/
第三後頭顆		0	
前顆結節	0		0
舌下神経管二分	0		0
フッシュケ孔	/		0
卵円孔形成不全	0		0
ベサリウス孔	+		0
翼棘孔	0		0
内側口蓋管	0		0
外耳道骨瘤	0		0
副オトガイ孔	0		+
顎舌骨神経管	0		0
下顎隆起	+		+
矢状洞溝・左		0	
口蓋隆起			+

+ : 有 0 : 無 / : 不明

い。主縫合の走行は複雑ではなく、縫合間骨はみられない。頭頂孔は左にみられる。大後頭孔の前縁に異常はないが、後頭骨底部には浅い咽頭窩が存在する。眉間および眉弓の隆起は弱く、鼻根部の陥凹はほとんどない。眼窩口は矩形と考えられ、その長軸はほとんど傾斜しないようである。上顎骨・下顎骨は比較的大きく、強い歯槽性の突顎が認められる。下顎骨の底縁は直線的で下顎枝はやや傾きが強い。

2) 椎骨・四肢骨

第一頸椎から第四頸椎までが頭蓋骨の下に位置し残存した。形態学的に特記すべきことはなく、関節症性変化などの病的所見も認められない。四肢骨はすべて骨粉状であった。

3) 歯

保存されている歯種と、その歯冠サイズは表3に示すとおりである。歯はいずれも永久歯である。計測は藤田(1949)の方法に従った。カリエスおよび歯石は、いずれの歯にも認められない。

下記の歯の形質的特徴としては、上顎中切歯および側切歯の舌側面は比較的強くシャベル状を呈しており、舌側面の陥凹は、中切歯については破損しているため計測できないが、側切歯では右1.31mm、左1.05mmに及ぶ。唇側面では中切歯および側切歯ともにシャベル状を呈さない。左右の上顎第1小白歯に介在結節は認められない。左上顎大白歯にCarabelliの結節は認められない。右は破損のため不明である。上顎第2大白歯のhypoconeは、かなり退化しており、Dahlbergの

表3 歯種および歯冠サイズ

歯種		保存状態		歯冠サイズ			
		左	右	左		右	
				近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径
上顎	中切歯	#	#				
	側切歯	*	*	8.51mm	6.29mm	8.13mm	7.06mm
	犬歯	*	*	7.77mm	8.38mm	7.99mm	8.68mm
	第1小白歯	*	*	7.48mm	9.91mm	7.43mm	9.59mm
	第2小白歯	*	*	7.19mm	9.69mm	7.53mm	10.05mm
	第1大白歯	#	*			11.01mm	11.37mm
	第2大白歯	*	*	9.47mm	11.60mm	9.30mm	11.86mm
	第3大白歯	*	*	8.61mm	11.01mm	9.11mm	11.14mm
下顎	中切歯						
	側切歯	*	#	6.58mm	6.61mm	6.73mm	
	犬歯	*	#	7.06mm	7.66mm		
	第1小白歯	*	*	7.52mm	8.02mm	7.33mm	7.78mm
	第2小白歯	*	*	7.49mm	9.13mm	7.38mm	9.15mm
	第1大白歯	*	*	11.89mm	11.31mm	11.83mm	11.41mm
	第2大白歯	*	*	10.94mm	11.12mm	11.07mm	11.37mm
	第3大白歯	*	*	10.32mm	10.88mm	10.97mm	10.05mm

* 歯冠の原形が完全に保存されている。

歯冠は保存されているが破損している。

基準の3+に相当する。下顎第1大臼歯では左右いずれも咬合面の溝はY型を呈する。第6咬頭が発達するが、その大きさはhypoconulidよりも小さい。第7咬頭、protostylidおよびdeflecting wrinkleは認められない。

文 献

藤田恒太郎、1949：歯の計測基準について、人類学雑誌、61：27-32。

Martin, R. und K. Saller, 1957：Lehrbuen der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer, Stuttgart.

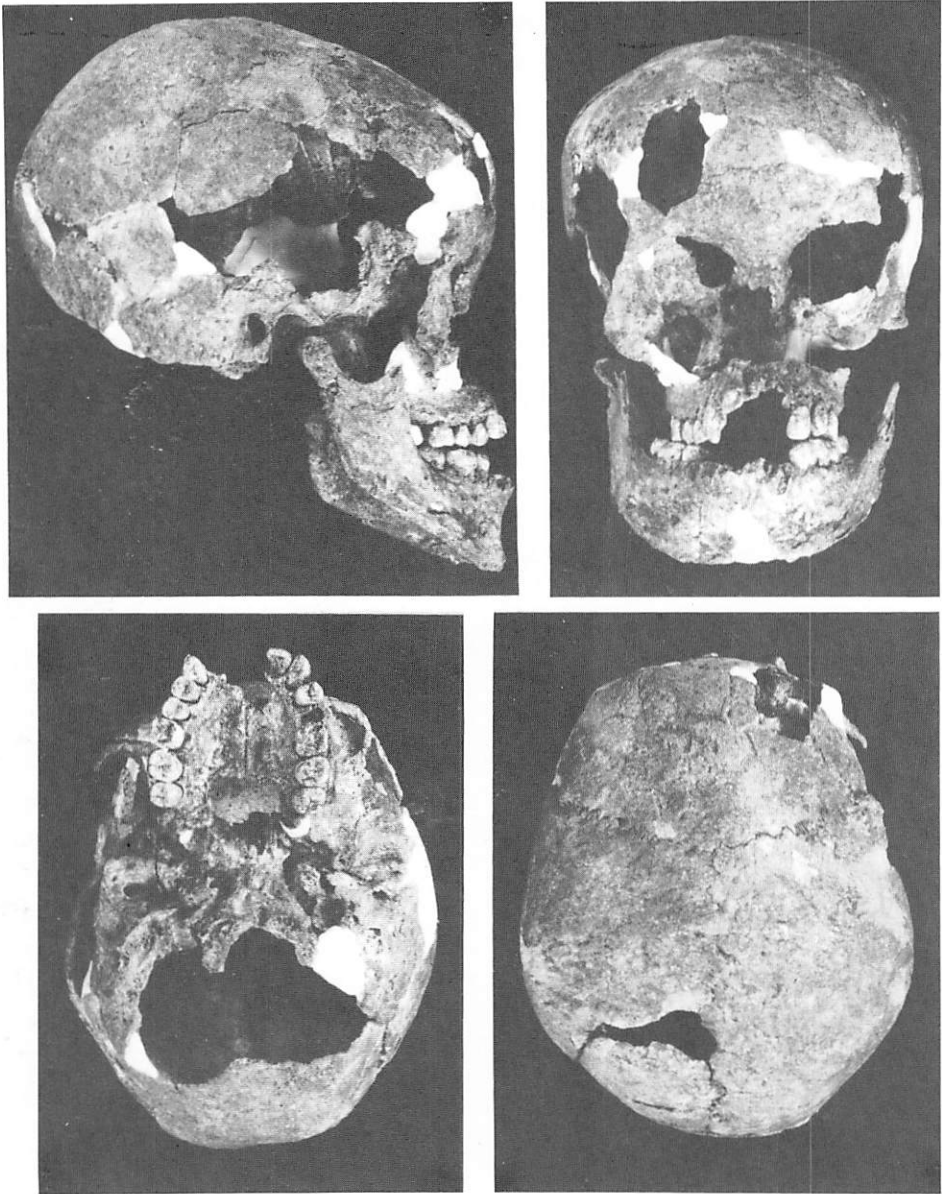


写真13 大川遺跡GP-2出土人骨

d 大川遺跡出土の動物遺存体

1989年度、大川遺跡からは、イヌを主体とする哺乳類をはじめ、鳥類・魚類・甲殻類・貝類・多毛環虫類などが出土した。現在、これらの同定を早稲田大学・金子浩昌氏に依頼し、その一部が判明しているのみである。したがって詳細な報告は、本報告に譲り、ここでは概要を述べることにする。なお、貝類については、北海道立稚内水産試験場の乗原康裕氏の御教示を得た。

—貝類—

現在までに36種が判明している。ほぼ集計の完了した包含層から出土した貝については、ウバガイ・サラガイ・コタマガイ・ホタテガイ・カキ・イガイが多くみられる。現在、北海道沿岸に棲息しないものでは、ベッコウイモやサザエが出土している。

—魚類—

サケ・タラ・カレイなど7種が判明しているが、これらは包含層主にI層から出土した遺物であり、今後、貝塚の土壌サンプルの整理が進むことにより、数種類の追加が予想される。

—鳥類—

SM-2第2貝層から、アホウドリ・ウミガラスが出土し、SM-2第3貝層からは、ヒメウカラス・カモメ類などが出ているが全体的にみて鳥類の骨は少ない。また、I層からニワトリの骨が数点出土しているが、これは比較的新しいものであろう。

—哺乳類—

SM-2第1・2・3貝層からイヌの骨が比較的まとまって出土しており、若い個体が多いという傾向がみられる。I層・II層にも多くみられるが、I層の場合は、現代のものがかかり含まれている。この他、貝塚から出土しているのは、クマ・キツネ・シカや海獣類とみられる骨である。また、ウシ・ブタ・ウマ・ネコは、I・II層（主にI層）から出土していることから、これも新しい資料として区別する必要がある。

—貝塚サンプル—

貝塚（SM-1～9）の土をサンプリングし、現在は水洗いしたものを3種類のふるいにかけて、選別作業を行っている。貝塚によって貝種組成の違いがみられ、コタマガイ主体のもの（SM-1、SM-2第1・2貝層）、イガイ主体のもの（SM-2第3貝層、SM-3～9）に分けられる。今後の作業の進行により、個々の貝塚の形成時期や性格が明らかにされるであろう。

（高田）



写真14 貝塚サンプルの選別作業

動物遺存体種名表

I 多毛環虫類

ゴカイ類

II 貝類

a 巻貝類

エゾアワビ (ミミガイ科)
 ユキノカサ (ユキノカサガイ科)
 コシダカガンガラガイ (ニシキウズ科)
 キサゴ (ニシキウズ科)
 サザエ (リュウテン科)
 ツメタガイ (タマガイ科)
 アヤボラ (フジツガイ科)
 ヒレガイ (アクキガイ科)
 チヂミボラ (エゾバイ科)
 クビレバイ (エゾバイ科)
 エゾボラモドキ (エゾバイ科)
 アツエゾボラ (エゾバイ科)
 ヒメエゾボラ (エゾバイ科)
 アニワバイ (エゾバイ科)
 ネジボラ (エゾバイ科)
 オオヒタチオビ (ヒタチオビ科)
 ベッコウイモ (イモガイ科)

b 二枚貝類

アカガイ (フネガイ科)
 エゾタマキガイ (タマキガイ科)
 イガイ (イガイ科)
 エゾヒバリガイ (イガイ科)
 ムラサキインコガイ (イガイ科)
 エゾキンチャクガイ (イタヤガイ科)
 ホタテガイ (イタヤガイ科)
 アズマニシキガイ (イタヤガイ科)
 ナミマガシワガイモドキ (ナミマガシワ科)
 マガキ (イタボカキ科)
 カワシンジュガイ (イシガイ科)
 イシガイ (イシガイ科)
 ウソシジミ (フタバシラガイ科)
 ビノスガイ (マルスタレガイ科)
 コタマガイ (マルスタレガイ科)
 ウバガイ (バカガイ科)
 ナガウバガイ (バカガイ科)
 エゾバカガイ (バカガイ科)
 サラガイ (ニッコウガイ科)
 ソトオリシラオリ (ソトオリガイ科)

III 甲殻類

イワフジツボ (イワフジツボ科)
 カニ類

IV ウニ類

エゾバフンウニ (オオバフンウニ科)
 キタムラサキウニ (オオバフンウニ科)
 ハスノハカシパン (ステクラ科)

V 魚類

サケ科
 マグロ属 (サバ科)
 フグ科
 ホウボウあるいはカナガシラ (ホウボウ科)
 ヒラメ科
 カレイ科
 タラ科

VI 鳥類

ニワトリ (キジ科)
 ウミガラス (ウミスズメ科)
 カモメ科
 アビ科?
 カイツブリ科
 アホウドリ (アホウドリ科)
 ウミウ (ウ科)
 ヒメウ (ウ科)
 カラス属 (カラス科)

VII 哺乳類

ノウサギ (ウサギ科)
 ドブネズミ (ネズミ科)
 イヌ (イヌ科)
 キツネ (イヌ科)
 エゾヒグマ (クマ科)
 ネコ (ネコ科)
 アシカ (アシカ科)
 トド ? (アシカ科)
 ブタ (イノシシ科)
 エゾシカ (シカ科)
 ウシ (ウシ科)
 ウマ (ウマ科)
 クジラ類
 イルカ科



写真15 大川遺跡出土の動物遺存体

e 大川遺跡周辺地域の地質

松田 義章 (日本地質学会会員)

1. はじめに

本遺跡は、西南北海道積丹半島基部東岸、余市川河口付近に位置している。なお、西南北海道積丹半島～余市にかけての地域は、Geologic Provinceとしては、いわゆるGreen Tuff Regionに属し、さらに東北本州弧北方延長部に相当する。

この地域一帯には、特に海岸部を中心として新第三紀中新世～鮮新世の紫蘇輝石・普通輝石安山岩を主体とする火山岩類およびディサイト質～安山岩質のhyaloclastiteやepiclastic rocksを主体とするVolcaniclastic Rocksが広く分布している。また、その中には、流紋岩質のhyaloclastiteの存在も報告されている。(Yamagishi and Dimroth 1985)

2. 余市地域の新第三系を中心とした地質概説

本地域を含む積丹半島基部の地質は、主に新第三系中新統および鮮新統よりなり、その上部に、平野部を中心として第四系更新統の古期崖錐堆積物、軽石流堆積物、降下軽石堆積物、および段

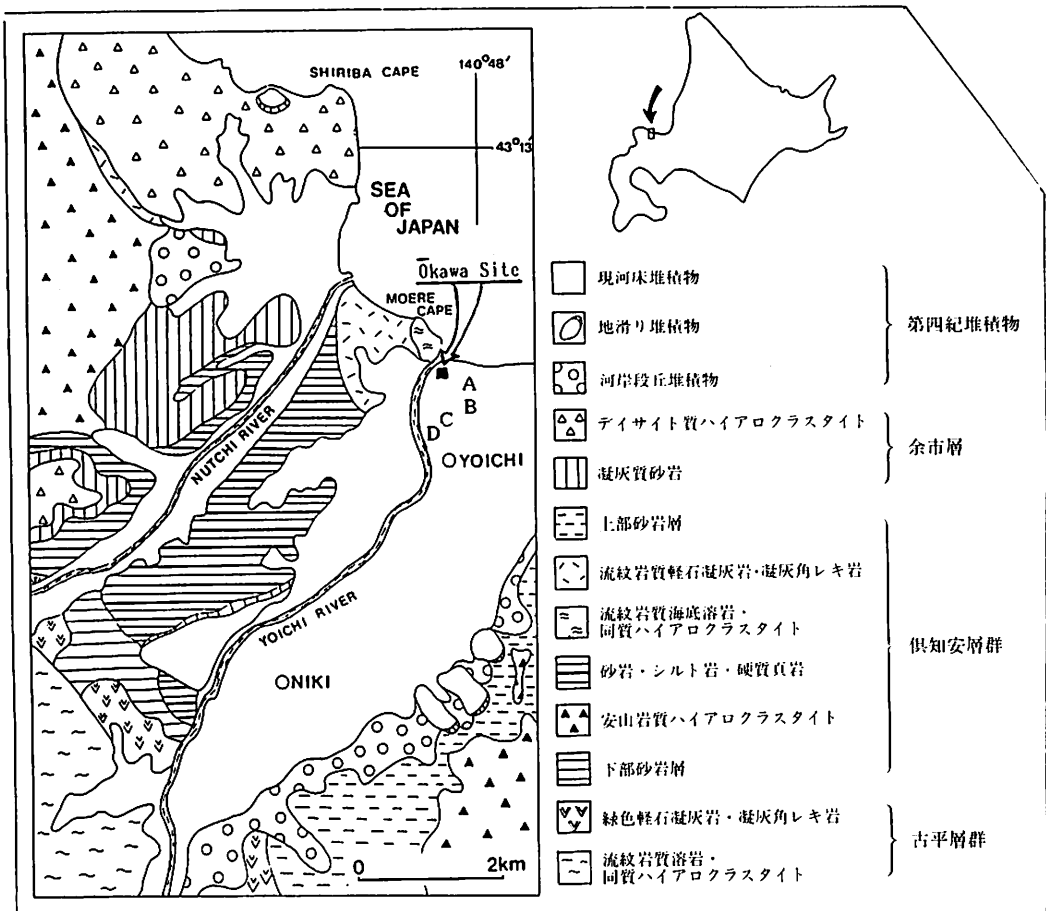


図7 余市町周辺地域の地質図 (山岸 1990を一部修正)

丘堆積物、完新統の崖錐性堆積物、地すべり堆積物、および現河床堆積物等が広くこれを覆っている。(図7)なお、余市町周辺地域における基本層序とその西南北海道標準層序との対比について(表4)に示す。すなわち、本貴跡の基盤とも言うべき新第三系の層序について、下位よりその概要を記すと次のようになる。

先第三系のbasement Rocks であるホルンフェルスを主体とする寒別変成岩類、粘板岩を主体とするリャムナイ層、および花崗岩類等を不整合に覆って、長尾・佐々(1934)による、西南北海道標準層序の福山統に対比される茅沼層群、訓縫～八雲統に対比される古平層群、八雲～黒松内統に対比される

倶知安群層、および瀬棚統に対比される余市層に区分されている。(齊藤他(1970)、Yamagishi(1981))特に、余市地域においては、上部中新統のものとされる倶知安層群および鮮新統のものとされる余市層が広く分布しており、本遺跡の西側に隣接するモイレ岬の流紋岩体は倶知安層群に、また、さらにその西側に位置するシリバ岬のデイサイトは余市層にそれぞれ対比されていた。しかし、その層序学的位置づけは必ずしも明確ではなく、目下、筆者らによって、それらの岩体の放射年代測定(K-Ar dating)を含めて検討中である。(Yamagishi and Matsuda, (1990))なお、モイレ岬の流紋岩はLava Podとしての産状を呈し、中心部においてはFlow Layerを呈するlavaであるが、周辺部ではhyaloclastiteないしobsidionに移化している。一方、シリバ岬はデイサイト質のLava Domeであり、漠大なdyke swarmが認められる。

3. 本遺跡発掘区周辺における第四系の地質

本遺跡の分布している余市地域には、上記モイレ岬において認められる新第三系中新統の流紋岩および流紋岩質のhyaloclastiteとは、やや岩質を異にする、第四系更新統の軽石流堆積物が分布する。この堆積物は、流紋岩、安山岩等の類質ないし異質岩片を多量に含み、主に余市川東側、黒川町付近に局部的に認められ、その層厚は20メートル前後である。さらに、余市町における丘陵地には、崖錐性堆積物および地すべり堆積物が広く認められる。なお、空中写真判読によると、余市川流域には2～3段の段丘面が認められ、これらの段丘面には層厚、数メートル～10メートル

地質系統		西南北海道標準層序 主として中新世 長尾・佐々(1934)	積丹半島基部東側地域 (本地域周辺) 主として斉藤他(1970)に基づく
新 紀	第四紀	完新世	沖積層 沖積堆積物・扇状地堆積物 段丘堆積物
		更新世	段丘礫層群 石倉噴出物層
	第三紀	鮮新世	瀬棚統 余市層
		中新世	黒松内統 八雲統 訓縫統 福山統
先第三紀		倶知安層群 古平層群 茅沼層群	
			蘭島層 パンノ沢層 小沢層 大和層 国富層 稲穂層 ヤチナイ層 辰五郎沢層 ペーペナイ層

表4 余市町周辺地域模式柱状図

ル前後の砂礫を主体とし、軽石や粘土等を混える段丘堆積物が認められる。さらに余市川は氾濫原が大規模なこともあって、その河床、特に河口から数キロメートル奥に入る地域に至るまでの河床付近には、層厚50メートル～60メートルの主として砂・礫・粘土からなる完新世堆積物（現河床堆積物）が広く分布している。因みに、これは海水面が現在より低い時期に形成された河口湿原堆積物ないし三角洲堆積物としての様相を呈している。一方、広田ほか（1985）によれば、この堆積物中の砂礫層は良好な帯水層となっているものの泥炭ないし泥炭質粘土を挟在するため、水質は不良であるとされている。なお、余市川流域周辺地域において、主に深井戸地下水調査の目的で、深度50メートル～80メートルのボーリング調査が実施されている。（図8）これによれば、地表から、10メートル～20メートルにおいては、主に貝殻化石を含む未固結の砂層からなり、それ以深は、未固結のシルト～粘土からなっている。一方、各地域毎に若干の差異は認められるものの、深度30メートル～40メートルないし45メートル～60メートルの層準には、層厚約10メートルに及ぶ未固結の礫層を挟んでいる等の特徴がうかがえる。さらに、今まで余市町地域において調査された知見を総合した概括的な地質断面図が既に公表されている。（広田ほか・（1985））。これらは、過去の海水準変動や余市川の河道変遷を伴うような大規模な氾濫など、この周辺地域において展開された地史・環境変遷をかなり具体的に示している。今まで述べてきたことから明らかのように、本遺跡発掘区の地質は、総て第四紀完新世の現河床堆積物および海浜性堆積物、すなわち、砂層よりなる。なお、その層序は、肉眼的に4層に区分される。このうち、表層の盛土（攪乱層）とその下部のdark brownを呈する漸移層を除くと、全体的にやや淘汰の良いcoarse sandからなっている。この部分はさらに大まかに2層に区分することができる。すなわち、上部層は、

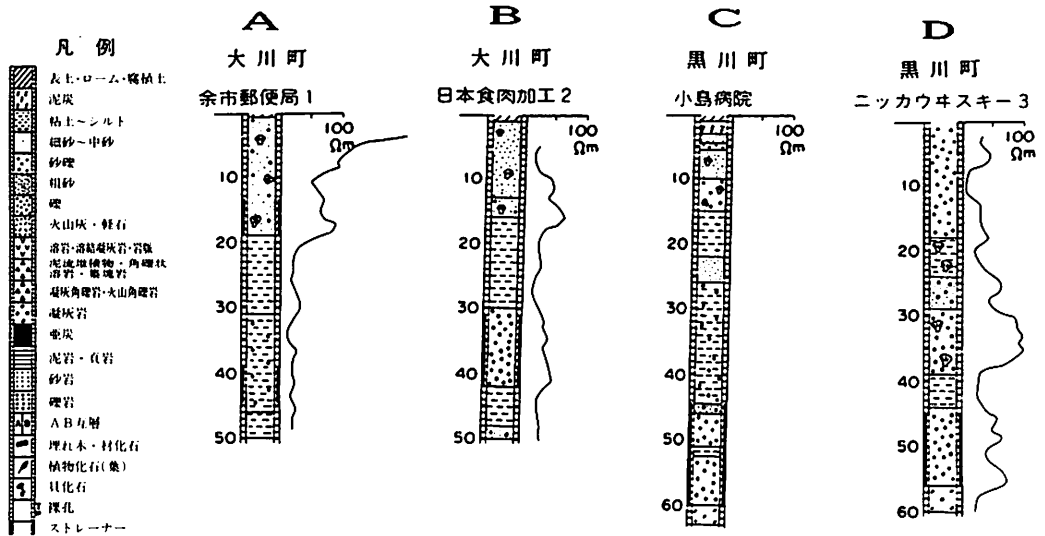


図8 余市川河口付近、本遺跡発掘区周辺地域における深井戸地質柱状図
（ボーリング調査地点A～Dは、図7の地質図上にそれぞれ示している。）

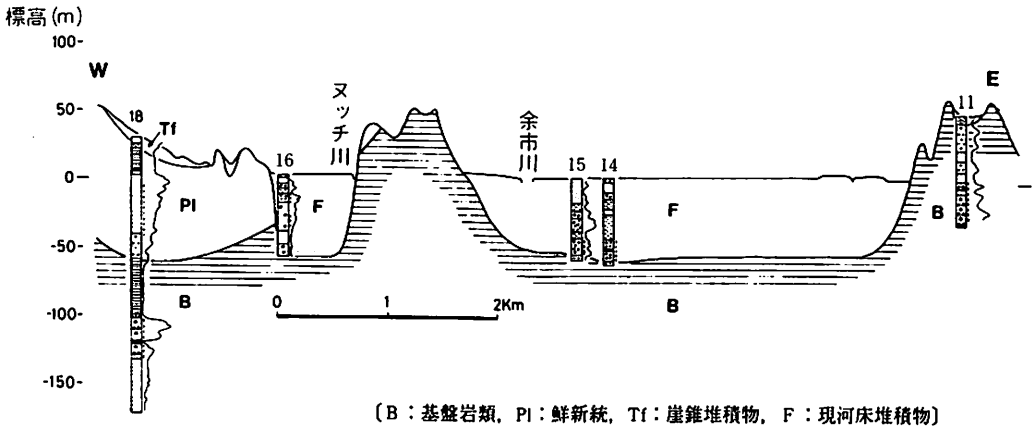


図9 余市地域における東西地質断面 広田ほか (1985) による

dark brownのmassiveなcoarse sandからなり、下層部はbrownの砂層中に pyroxeme, hornblende magnetite等のcoloured mineral (heavy mineral)がparallelに濃集したlaminaの認められるcoarse sandからなっている。さらに詳しく観察すると、下部層内部において、normal grading を示す部分の他、reverse gradingを呈する部分も認められる。これは、海浜環境下における大規模な波浪によって、あるいは余市川の氾濫による河床変動の際に再堆積したことを示しているものと思われる。一方、本年度発掘区の北部(海岸付近)においては、局部的に、非常に不淘汰なcoarse sandを挟む部分が認められたり、cross laminaを呈する部分が認められる。これらの層相(Sedimentary Facies)を解析し、その堆積環境を明らかにするために、今後、特に本発掘区における砂層のVerticalな異変については、より微視的なアプローチによって検討を加える必要がある。このため目下、粒度分析、組成鉱物分析を行っているが、そのデータについては後日公表の予定である。

参 考 文 献

- 長谷川潔・小山内照 (1978)「国富一定山溪地域の地質と鉱床」地下資源調査所研究報告 第5号 北海道立地下資源調査所
 長谷川潔・八幡正弘 (1986)「新生代東北本州弧地質資料集・第1巻 その2」島弧横断ルートNo.2 宝文館
 広田知保・和田信彦・横山英二・菅和哉 (1985)北海道水理地質図幅・同説明書 第7号「倶知安」55P 北海道立地下資源調査所
 猪木幸男・相見俊弘 (1954) 五万分の1地質図幅・同説明書「小樽西部」23P 北海道開発庁
 松田義章・藤田郁男 (1987)「北海道余市モイレ岬の地質」日本地質学会第94年学術大会講演要旨 P214 日本地質学会
 松田義章 (1988)「蘭島遺跡B地点およびチブタシナイ遺跡の地質」蘭島遺跡・チブタシナイ遺跡調査概報 P79-91
 小樽市教育委員会
 松田義章・岡村聡 (1989)「余市町沢町遺跡周辺地域の地形・地質および堆積構造」沢町遺跡 P13-20 北海道余市町教育委員会
 齊藤昌之 他 (1970)昭和44年度広域調査報告書「国富地域」44P 通商産業省
 Yamagishi, H., (1981) Geology of the shakotan peninsula Hokkaido, Japan. Rep. of the Geol. Surv. of Hokkaido
 No.52. P1-29. Geological Survey of Hokkaido.
 Yamagishi, H., and Dimroth, E., (1985); A Comparison of Miocene and Archean rhyolite hyaloclastite.
 Jour. Volcanol. Geotherm. Res. vol.23 p337-355, Elsevier, Amsterdam.
 Yamagishi, H., and Matsuda, Y., (1990); The Neogene submarine felsic rocks at Yoichi Beach, Shakotan
 Peninsula, Hokkaido.
 Annual Meeting of Volcanological Society of Japan 1990, abstract (in press).
 山岸宏光 (1990) 表層地質調査報告書「余市地域」 北海道開発局 (印刷中)
 長尾 巧・佐々保雄 (1934)「北海道西南部の新生代層と最近の地史」『地質学雑誌』40・41 日本地質学会

V 考 察

a 大川遺跡出土の陶磁器について

1 概説

1989年度に大川遺跡から出土した陶磁器は、破片が主体であるが、沈子が1,310点、その他が23,494点、計24,804点というぼう大な量である。現在、これらはすべて水洗され、出土区、層位、資料番号などが注記され、概略の分類によって整理箱に収納されており、順次接合作業が進められている。しかし、分類は専門的なものではなく、それらの種類別内訳はまだできていない。また、年代や産地が決められたのは一部のものだけであり、後はこれから検討されなければならない。

現在明らかなことは、この大川遺跡から出土した陶磁器は、中世後期ごろから近代に至るまでの数百年間に、本州からもたらされたものであり、ごく一部の舶載品以外は大部分が国産品であるということである。

一応陶磁器の種類をみると、陶器としては碗・皿・鉢・德利・甕・壺・片口・行平・土瓶・急須などがみられ、磁器としては碗・皿・鉢・德利・銚子・盃・急須などがある。これらのなかで、現在特に注目されるものは珠洲系播鉢（14世紀～16世紀）、舶載青磁（15世紀～16世紀）、美濃灰釉皿・碗（16世紀後半）、備前系・唐津系・美濃系の播鉢（16世紀～17世紀）、見込に蛇ノ目軸ハギのある皿（17世紀～18世紀）、見込に五弁花のある染付皿（18世紀）、コンプラ瓶（19世紀）などである。

中世後期から近代に至る数百年間、この遺跡を中心に営まれた人間社会のなかで、かつて必要とされやがて廃棄された各種の陶磁器は、その一つ一つにかつての生活の印が残されているのであり、それらを通じて当時の生活を再現して考察しなければならないが、特に近代以前のアイヌの人達と和人とが、ここに残された陶磁器とそれぞれどのようなかかわりがあったかを探ることは、今後究明されるべき課題の一つとして重要である。

2 舶載青磁（写真17-9・10）

舶載青磁と思われる破片が2点出土している。1点は碗の口縁部破片で、現在の大きさは幅4.5cm、高さ7cmである。厚さは下端で0.6cmでやや外反する口縁に向って薄くなり0.2cmとなる。側面にはへら書きにより写実的な蓮弁文が施されている。釉は明るい緑色で外面には荒い貫入がある。

他は盤の底部破片で、5片が接合されたものである。現形の大きさは長さ14.5cm、幅12.5cmであり、高台外径は7.5cm、内径が5.8cmで、高台の幅は0.85cmと厚い。緑灰色の釉がたっぷり施され貫入がみられる。高台についてみると、畳付の上、内側面および内面中央の径1.5cmの円形状に施釉され、その他は無釉で赤褐色の素地となっている。器体の厚さは高台から5cm上で0.5cmであり、素地は暗灰色で硬い。明後期の15世紀から16世紀ごろのものであろうか。¹⁾

3 珠洲系播鉢（写真16）

全体の概要

大川遺跡から出土した^{すすけいすりばち}珠洲系播鉢を器体の部分別にみると、口縁から底まで続いた大破片が1点、口縁部が60点、胴部が69点、底部が17点、計147点となる。なお、口縁部破片は、口唇部に施文されているものが30点、同じ部分が素文のもの30点に細分される。これらは、一応破片を接合した後の点数であるが、個体数はこの段階でも、かなりのものと推測される。

これら破片の大きさは、大きなもので口縁部が幅9cm、長さ10cm、胴部が幅14cm、長さ11cm、底部が幅18cm、長さ10cmほどであり、口縁から底まで続いた大破片で、幅15cm、長さ16cmである。したがって、口径・器高・法量を知ることができる資料は、ほとんどない。

胎土は径0.1cmから0.2cm程度の夾雑物を多少含んでいるが、ほぼ緻密といえるものが多い。整形はロクロにより、内外面とも指などで状の調整痕がみられ、なかには外面がかなり凹凸のはげしい粗雑な作りのももみられる。また、底面には例外なく静止糸切痕をとどめている。焼成の度合は、ある幅がみられ、普通のものと同様よりも高温で焼かれたものもみられる。そして色調は、普通のもものが暗灰色を呈し、部分的に灰褐色となるが、高温で焼かれたものは帯紫灰色を呈している。

口縁部の特色

口縁部の最も上位の口唇は、平担にかっちり作られており、その幅は、有文のもので1.1cmから1.9cm、素文のもので1.1cmから1.5cmあり、体部の厚さよりも厚く作られて肥厚している。有文のもの文様は、櫛歯による波状文で6条から7条の痕跡がみられ、あるピッチで連続して施文されたようである。素文のものでは、口唇部の中央を指でなでながら多少凹ませて一周したのももみられる。

口縁部破片で観察される卸し目は、口唇内端から1.5cm下方から引かれるものと、8cm下から引かれるものなど様々であるが、4cm前後から引かれるものが最も多い。卸し目の施文原体は、櫛歯10本前後を一単位とし、間隔のまばらなものと密なものが存在する。

底部の特色

底面は平底であり、全例に静止糸切痕がみられるが、比較的鮮明なものと不鮮明なものがある。側方部は底面から約45度の角度で開くものが多いが、大破片でみると口縁近くでは少し内傾しており、そのまま45度の角度で開くとは限らないようである。厚さは側方部から平底に至る部分が最も厚く、薄いもので1.3cm、厚いもので2.7cm、平均2.6cmである。他方、平底の中央部付近で最も薄く、薄いもので0.8cm、厚いもので1.5cm、平均1cmである。卸し目は、内面底まで密に施されているものと、内底面には施されず内側面にとどまっているものがある。また、内底面が使用のため磨耗している例が、少数ではあるが存在する（写真16右下の1点は珠洲系でないので、ここで訂正しておく）。

編年上の位置

正確にはこれからオーソライズされなければならないが、大川遺跡から出土した珠洲系播鉢の

型式は、従来設定されている7型式²⁾のなかの、第Ⅳ型式に該当するものと、第Ⅴ型式または第Ⅵ型式に該当するものがあり、後者が主体をなすものと考えられる。したがって、年代は14世紀代から15世紀後半にまたがるものと推測される。

その意義

大川遺跡で珠洲系播鉢が出土するまで、北海道における珠洲系陶器の出土遺跡の北限は神恵内村の観音洞窟³⁾であった。しかし、現在では大川遺跡がこれに代わったのである。さらにその出土数は破片で147点という多量であり、道内の他遺跡からの出土数がきわめて少ないことに対し注目される。本遺跡の調査はさらに継続される由なので、おそらく出土数はさらに増加すると予測される。これらを踏まえて、北海道のこの地に中世後期にこれらがもたらされた背景、それらを使った人達などの問題が提起されるであろう。

4 美濃灰釉皿・碗（写真17-6・7・8）

美濃灰釉皿および碗の破片と考えられるものが、約71点出土している。器体別の内訳は、口縁部が33点、胴部が32点、底部が6点である。

口縁部は端反りのものが多く、厚さは薄いもので0.2cm、厚いもので0.5cmである。底部は高台造りで、小さいもので外径5.2cm、内径4.1cm、大きいもので外径6.7cm、内径5.6cmである。高台の畳付および内面には施釉されない。釉の色調は暗緑・灰緑・灰黄色を呈し、貫入のみられるものもある。なお、見込に径5.8cmの円形状の無釉のものが1点、同じく見込に菊の印花が押されたものが1点⁴⁾ある。

5 見込に蛇ノ目釉ハギのある皿（写真17-4・5）

見込に蛇ノ目釉ハギ⁵⁾の痕がある皿の破片が、磁器、陶器ともそれぞれ10点ほど存在する。磁器皿の小さいものは、直径が13cm、高台外径が3.8cmと小さい。大きい例では、直径は不明であるが高台外径が10.4cmあり、かなり大きい直径と思われる。前者は高台に釉を施さず、後者は高台内面に施釉している。陶製ではすべて直径が不明であるが、大きいもので高台外径は6.5cmである。いずれも高台付近には釉を施さない。釉は緑、灰緑、帯黄灰色を呈する。大半は17世紀後半から18世紀の唐津・伊万里の雑器皿であろうか。

6 見込に五弁花のある肥前磁器皿（写真17-2・3）

見込に五弁花、底裏銘に「渦福」⁶⁾のある染付磁器皿の破片が52点ある。ほぼ完形に近いものでは、口径が13.5cm、底径が7.7cm、高さが4.3cmのやや深目の中皿である。皿のほかに、直径8.4cm、厚さ1.2cmの磁器で、表の中央に五弁花、裏の中央に「渦福」を呉須で施した完形の円形蓋状のもの（写真17-2）が1点出土している。これらは、18世紀の肥前磁器の染付皿類であろう。

7 コンブラ瓶 (写真17-1)

コンブラ瓶の肩部の破片が4点出土している。そのなかの一番大きいものは、8.5cmの幅で高さが6cmあり、厚さは0.4cmと薄い。4片とも肩の稜線の直下に、外国文字が呉須により手書きされている。一番大きい破片には、NSCHZA、次に大きい破片にはPA、最小の破片には二字の断片しかみられない。そして四者の文字は完全なものではなく、その一部がそれぞれ残ったものである。

さて、コンブラ瓶にはJAPANSCHZAKYとJAPANSCHZOYAの2種のオランダ文字が書かれたものがあり、前者は日本の酒を入れた瓶、後者は日本の醤油を入れた瓶であることが知られている。⁷⁾したがって、大川遺跡から出土した大きい方の破片は、酒瓶の12文字のうち6字が該当し、日本の酒を入れた瓶であることは確実である。中破片はPAだけではどちらに属するのかわからない。また、最小の破片は見方によってはZAの一部に見えるので、酒瓶であるかもしれない。

北海道におけるコンブラ瓶の資料は、伝世品の完形1点を松前町松本ヤス氏が所蔵されている。⁸⁾また、出土品としては、上磯町矢不來天満宮跡から2個体が出土し、うち1個体は酒瓶であることが判明している。⁹⁾さらに、厚田村から出土した約25点ほどの破片が、北海道開拓記念館に収蔵されているが、未公表のため詳細は不明である。¹⁰⁾ (松下 亘)

注

- 1) a. 東京国立博物館編(1978)『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館
b. 松崎水徳ほか(1980~1989)『史跡上之國勝山館跡』I~X 上ノ国町教育委員会
- 2) a. 吉岡康暢(1979)『北海道の中世陶器~中世日本海海運史の一陶~』『日本海文化』6号 29~62
b. 吉岡康暢(1984)『北海道の中世陶器~中世日本海海運史の一陶~』『北海道の研究』2 考古篇II 237~270 清文堂
- 3) 注2)に同じ
- 4) 松崎水徳ほか(1986)『史跡上之國勝山館跡』ⅧのPL. 8にも同様のものが示されている。
- 5) 佐賀県立九州陶磁文化館編(1984)『国内出土の肥前陶磁』同館による
- 6) 注5)による
- 7) 日本観光文化研究所(1985)『海を渡った日本のやきもの』ぎょうせい刊
- 8) 『第30回特別展・日本海-空白の中世蝦夷世界をさぐる-』北海道開拓記念館のP.25
- 9) 前田正憲ほか(1988)『上磯町矢不來天満宮跡』北海道埋蔵文化財調査センター
- 10) 北海道開拓記念館の学芸員氏家 等氏のご教示による。



写真16 大川遺跡出土の珠洲系擂鉢



写真17 大川遺跡出土の特異な陶磁器

b 大川遺跡における銚帯金具出土の意義

伊藤玄三（法政大学文学部）

今回、北海道における銚帯金具の初出例が余市町大川遺跡で確認された。昨夏、八戸市での集まりの折に、調査者 宮 宏明氏にその事実を教えていただき、やはり予測してはいるところではあったが出土したかという感懐を禁じ得なかった。更に年末には余市水産博物館長 三浦清治氏が現物を御持参になり、直接それを拝見させていただく機会も与えられた。その結果、報告中にも見られるように紛うかたなき青銅製銚帯金具であることを確認した次第である。

銚帯金具は、方形の巡方1点と、半円形状の丸柄1点の計2点である。具体的計測値は報文にゆずるとして、巡方の方はやや小形であり、それに比して丸柄の例は相対的に大きい。一般的にセットとなる巡方と丸柄に比してそぐわない感があり、恐らく本来的には別々の帯に附される性質のものではなかったかと推測される。その点では、巡方の方が薄手で、背面に鑄出された鋳も磨耗し、加えて上方両隅に穿孔までなされており、二次的な修補の折の綴じ孔と観察される。

このような2点の銚の差は、出土状態が包含層中であつたということとも関連して理解できよう。共に表金具だけの断片的な出土品であり、墳墓出土品例の如くまとまりあるものではないのであり、或いは二具分の銚帯金具の散在的出土とも見られるところである。明言は出来ないが、実は一具だけではない存在の可能性を考えさせるとすれば、この銚帯金具の示す背景が広いものであつたことが示唆されると思われる。

銚帯金具は、時折古墳・官衙・宮殿・城柵などの遺跡から遺物として発見される。これは後述するように奈良時代すなわち8世紀に唐制にならって整備された『革帯』の飾金具であつて、遺跡においては革の部分が腐朽し去っているために、金具の部分のみが発見されるのが通例である。此の時期に、律令国家は東北地方で顕著に蝦夷との接触をもっていた。律令的服制に係る革帯の金具として用いられた銚もまた律令の文物の流入として東北地方の墳墓（所謂末期古墳）から出土する例があり、和同開珎なども加わっている。それと相似た様相を大川遺跡の銚帯金具も示すものと理解される。勿論、墳墓出土品ではなかつた点での差はあるとしても、これらの遺物の伝播の意味は類似していよう。それはまた、恵庭出土の和同開珎、恵庭・江別の末期古墳、近年広く知られるようになったこの頃の土師器の出土とも関連するものであり、8世紀代の律令社会や東北地方と共通する文物の存在を証明するものであり、しかも、律令的位階と関連する銚帯の示すところには明確に政治的交流の背景がうかがえる。即ち、この余市地域を含めて北海道西南部には律令国家との強い交流を有する集団が存在したことが示されていると見て良からう。いうまでもなく、東北地方も含めてこの北海道の地も律令国家の版図外ではあつたが、蝦夷や肅慎の朝貢・内附の記事もあつて、現地の集団中には律令国家と交流をもつものがあつたことは容易に推測できる。その交流の証跡を明確にし得る例を今回得たことの意義は、高く評価されるであろう。

c 大川遺跡周辺の歴史的背景と旧上ヨイチ運上家について

佐藤利雄（日本民俗学会会員・北海道文化財調査員）

1 はじめに

本遺跡が所在する余市川下流域、特に川口付近は、史前に遡る人間居住の痕跡を多く残しているところである。

余市川は北後志地方における最大河川である。その水源を余市岳（1,488m）の溪谷に発し、流路延長52.2kmの流域は山地丘陵に囲まれて43.3km²の余市平野を形成し、日本海に面する余市湾にその川口を有している。

川口左岸はモイレ岬（65.4m）を起点とする丘陵が、北西と南西に分岐して走り、川筋の平地面積は狭小である。

右岸一帯は、余市川が運んだ土砂が生成した沖積地帯をひろげている。

この川口から東西に、汀線に平行してフゴッペトンネルに至っている砂丘は大川砂丘と名付けられている。国道5号線は、この砂丘の上を走っている。

この砂丘上における遺物出土の状況は、一帯的には恵山式土器が出土し、砂丘西端では亀が岡式土器の出土が認められている。

本遺跡は、この西端域に属している。 現行余市川の川巾は約100mである。

2 中世のころ

ヨイチの地名が歴史文献に現れるのは、管見によれば『新羅之記録』（正保2年・1646）が初見である。松前氏初期の事績を記述しているこの著書は、当時のえぞ地の状況と共に和人移住の事情についても記しており、その中で「抑も往古は、此国、上二十日程、下二十日程、松前以東はくろがわ川西はよいち地迄人間往する事、右大将頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討しなま御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡って居住す」と記している。

ここに見る「與依地」が、以後のヨイチの初現である。

頼朝の奥州征討は文治5年（1189）である。この時の残党らが逃れ渡り来て住み着いたのを、えぞ地への多数移住の始まりとしている。

余市町の沿革資料でもこの説を採り、なお「蓋し之が本町和人渡来の濫觴なるべしと思はれる。」（昭和8年『余市町郷土誌』）と記している。松前地（和人地）より與依地までは20日の日程であると言う。

中世初期のこの記事からは、ヨイチの先住者である民族のことを知ることはできないが、アイヌ文化の出現を14世紀とする説からすれば、12世紀末のこの頃は擦文文化人が住んでいたこととなろう。

以後、和人の往来が繁くなり、定着する者もあるといわれ、擦文文化の終焉に続くアイヌ民族文化社会に至るのである。

アイヌ社会と近接し、また混在するようになった和人は、その文化の相違を優越感として侮蔑

をひろめたので、アイヌとの間に深い人種的な摩擦が生じていった。

文治5年の和人の渡海移住が始まってから、267年を経た康正2年(1456)に、志濃里の和人鍛冶屋にアイヌ少年がマキリ(小刀)を注文したところ、その出来具合と代価のことで口論となり、怒った鍛冶屋がその少年を刺殺するという事件が起きたが、その原因の底には、和人のアイヌに対する優越感の作用があったのである。この事件はアイヌに積年の不満を爆発させ、呼応して立ち上った東西のアイヌによって、東は鶴川、西は余市にいたるまでの和人が多く殺害され、生き残った者も松前、上ノ国付近まで追い込まれたのであった。余市郷土誌は「余市に居住せる和人の多くも襲殺され、再び和人を失うに至った」と記している。事件の翌年、長禄元年(1457)5月、東部の酋長コシャマインが蜂起するに及んでその勢いは増し、和人豪族を襲いその館12のうち10館を陥落させたが、コシャマイン父子が蠣崎軍によって射殺され、同族に死傷するものが出るなど形勢が逆転して敗退し、「コシャマインの乱」といわれたアイヌの蜂起は終熄した。しかしアイヌの不信不満は消えることがなく、和人との紛争は断続的に繰り返され、蠣崎氏がアイヌとの一応の融和を見るまでには約100年の歳月を費やしたのである。

3 近世のころ

近世に入り江戸幕府が開かれ、蝦夷島主である蠣崎氏もその傘下に馳せ、姓を松前氏に改めて松前藩を成立させて幕藩体制の一員となった。

ヨイチの地名が再び文献上に現れたのは、寛文9年(1669)に起きた「シャクシャインの乱」においてである。この乱の発端は、東地に住むアイヌの地域グループ間におけるイオル(漁獵圏)の対立から来た紛争にあったといわれるが、これに松前藩が深くかかわったことから、当時はまだ対等であった交易における松前藩の強圧的な態度と、搾取的な交換比率に対する不満が頂点に達する状態にあった事から、そのほこ先が松前藩に向けられ、和人对アイヌの戦いに進展して行ったのである。これより先、70才を越したヨイチの大將チクラケがこの是正を松前へ訴えに出たところ、法度を犯したとして首を切るの髭を切るのと侮辱され、その上折檻を受けて命からがら逃げ帰った事件があった。チクラケは誇を傷つけられ面目を失ったことから、同族を促して戦いを挑もうとしたが、反対するものがあるって堪え忍んだという。ヨイチアイヌには既に叛意を抱いていたのであった。ヨイチで殺された和人は43人であったという。

この乱は幕府も関与するところとなり、東北3藩による応援も図られたが、結局は松前藩の鎮めるところとなった。シャクシャインが松前側の謀殺に逢い、本拠のチャシも陥落して主流の戦いは一応の終熄を見ることになった。しかし地方には未だ不穏が続いており、特にヨイチは西地における主要勢力であったので、松前藩は翌10年將士雑兵共493人(「蝦夷蜂起」)を派遣して鎮圧とその事後処理に当らせた。ヨイチで戦闘の記述は見当らない。当時の余市川は懐が深く砂洲による中島も点在して軍船の碇泊を容易にし、川口付近は將兵の駐屯に適地であった。遠くからふと・りしり・そうや・てしおのアイヌもこの地を集って「つぐない」に応じ、以後の従属を誓わされたのである。

農業基盤のない松前藩では、家臣の給与法は他藩と異なっていて、下級藩士は扶持米を給したが、上級家臣には和入地の知行と共にアイヌ地における交易が認められた。

この交易の地は商場といい、のち場所と呼ばれた。交易権を有する家臣を場所持ちと称したが、知行地・地行主ともいわれた。

ヨイチの地域は現今の余市郡一円であるが、これを余市川の真中を境界に、右岸東部を上ヨイチ、左岸より西部を下ヨイチとして場所が設けられた。上・下ヨイチ場所の給地は元文年間（1736～1740）に始まったとされるが、天明6年（1786）の『西蝦夷分間』には上ヨイチ松前八兵衛、下ヨイチ松前左膳とある。共に松前藩主と血縁の家柄で、その先祖は寛文の乱におけるヨイチ出陣にかかわりをもつ家系である。

場所における交易は、はじめ知行主の直捌であったが、のちこれを商人に委任して行なうようになって場所請負制が始まり、以後これが続いたのである。

上・下ヨイチ場所の請負人は、そのはじめから永く近江両浜出身者が占めていたが、文政8年（1825）に秋田塩越出身の竹屋長七（初代林長左衛門）が請負人になった。林家は以後、明治2年（1869）に場所請負制が廃止されるまで、4代44年間続いた。

4 上ヨイチ運上家のこと

運上家は運上屋とも書かれる。本稿は林家文書の用字に従い家を用いた。

運上家の初形は、知行主が交易のために設けた屋舎であった。「このあたりから、運上屋といって、海産物を取りおさめさせる役所があって、その役人や、またほかの人たちも住み、アキノの住家もそれに軒をならべていりまじっていた。」（『えみしのさへき』菅江真澄）という環境であった。

交易が請負人に移り、請負金を運上金名目で納付させたことから、運上家と呼ばれるようになったのであるが、時代が下り蝦夷地に対する国内関心がたかまると、それを反映して幕府、松前



写真18 目賀田帯刀画（北大図書館蔵）『蝦夷歴検図』安政4年頃の余市川を挟む上(右岸)・下(左岸)ヨイチ場所運上家

藩から請負人に色々な義務が課され、反面権利も付与されたので、運上家も半官半民的な機能を帯びるにいたった。

下ヨイチ運上家については、すでに確認修復されているので論外とするところである。

上ヨイチ運上家は上・下ヨイチ場所の一括請負により、その主な機能は下ヨイチ運上家に譲って分館的役割を負うことになった。余市川渡船を司り、ヲタルナイ・イシカリ方面への交通の要所にあり、公私諸用の連絡・通行者の宿泊、荷物の継立などの機能を果していたのであった。林家文書に残る上ヨイチ運上家の絵図（安政2年推定）は、『竹四郎廻浦日記』（安政3年・1856）の記述によってその位置が確認されるものであった。

安政2年の「箱館奉行所御尋に付差出し」という、林家文書による運上家の建物は次のような規模のものであった。

上ヨイチ運上家 一棟 梁間七間 桁間十間

次の記録は明治3年、元場所請負人から出された上ヨイチ運上家に係る最後のものである。

『余市御本陣付建物家棟員数書上』（抜書）

・上余市

一、元運上家 六間 拾四間半 壹棟

・余市

秋漁場付蔵々何ヶ処間数何間有之候哉

一、漁場小家 一ヶ所梁六間桁十四間半

引用・参考文献

- 「新羅之記録」（『新北海道史』第7巻）
「余市平野のおいたちと水害」 久保武夫（『郷土と科学』 No. 55・56）
「北海道河川図」 昭和50年 北海道土木協会
「蝦夷蜂起」・「蝦夷談筆記」（『日本庶民生活史料集成』第4巻）
「寛文拾年秋蜂起集書」（同上）
「津軽一統志」（『新北海道史』第7巻）
「上・下ヨイチ運上家の研究」 佐藤利雄（『北海道の文化』第36号）
「よいち歴史あれこれ」 佐藤利雄（『ひびけ』20号・21号・23号）
「えみしのさへき」 菅江真澄（『菅江真澄遊覧記』2） 東洋文庫
「擦文文化」 藤本勉 教育社歴史新書
「アイヌ考古学」 宇田川洋 教育社歴史新書
「アイヌ民族抵抗史」 新谷行 三一新書
「北海道近世の研究」 榎森進 北方歴史文化叢書
「北海道の歴史」 県史シリーズ1
「日本北方史の論理」 海保嶺夫
「松前町史」第1巻史料編 松前史編集室
「竹四郎廻浦日記 上」 高倉新一郎
「日本史年表」 歴史研究会編
「余市町郷土誌」 昭和8年 余市町教員会
「余市町勢要覧」 昭和9年 余市町役場
「安政6年ヨイチ御場所見廻り日記」 余市町史資料叢書3輯 余市町史編纂室
「余市町史」第1巻史料編1 余市町

VI 小 括

本項では、1989年度に検出された遺構・遺物について若干の考察を加え結びとしたい。

擦文文化期の住居址(図4、SH-1~5)は、いずれも一辺が2m~3mの小型住居址であり、竈もない。河口部分における生業等からもシーズン・キャンプとみるのが妥当である。発掘区域の東側に接して検出されたSH-3と4は焼失住居であった。また、吉崎報文にもあるように炭化米がSH-1・3・5および複数の焼土からも確認された。擦文文化期における炭化米の確たる検出例は特筆すべきものであり流入経路等にも及び重要である。

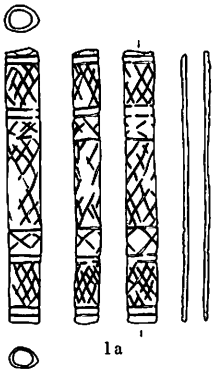
墓壙(図3~5、写真2)は続縄文(後北C₂・D式)文化期9基、擦文文化期 3基、中世アイヌ文化期? 1基(GP-4)、近世アイヌ文化期 5基が検出された。これらのうち、後北C₂・D式期の合葬墓が3例検出された。GP-4からはガラス玉が60点出土した。うち5点が辣蕪(らっきょう)状のきれいな緑色玉で、きわめて特異な形状を呈するものである。他に垂飾とみられる螺旋状の鉄製品も伴出しており、これらの遺物や人骨の散乱状況等から被葬者及びその埋葬に関して何らかの理由があったと推察される。

SH-3とその近くの土壌からは、鞆羽口や鉄滓等が出土している。鍛冶関連の場として位置づけられよう。

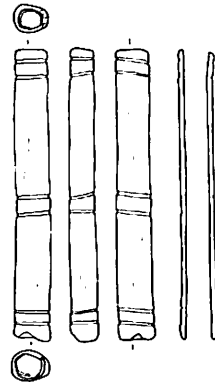
MO-1・2(図5、写真3)はチャシの濠とみられる遺構である。標高3m弱の砂丘上に立



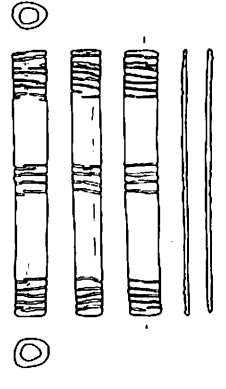
写真19 大川遺跡出土の骨角器



1 (R18Grid, 1層)



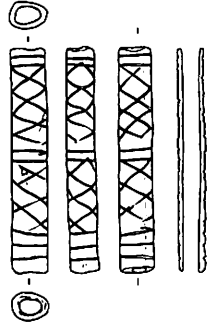
2 (R19Grid, 1層)



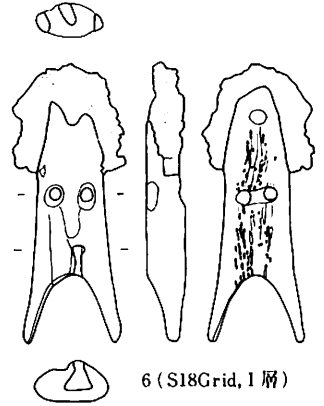
3 (SM-2, 第1貝層)



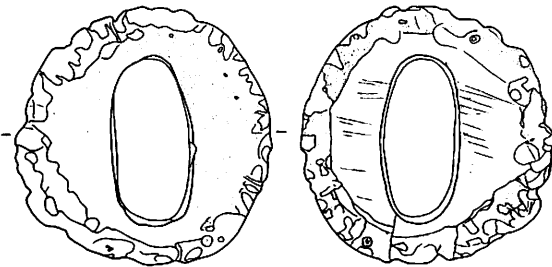
4 (SM-2, 第1貝層)



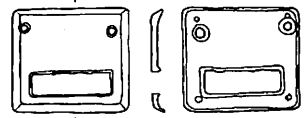
5 (SM-2, 第1貝層)



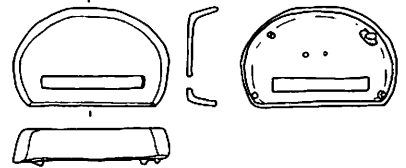
6 (S18Grid, 1層)



7 (R20Grid, I層とSM-2第1貝層のものが接合)



8 (T19Grid, II層)



9 (T19Grid, II層)

図10 大川遺跡出土の骨角器と鈔帯金具

5cm

地し、縁辺部に直交するように掘られており、溝状遺構もそれに平行する。構築年代については、放射性炭素による年代測定結果と濠の出土遺物等から考えていきたい。

貝塚(図5、SM-1~9、写真3)が9カ所確認された。次年度の発掘区域にかかるものもあるが、いずれも、アイヌ文化期の所産とみられる。動物遺存体をはじめとして、陶磁器・金属製品他が多数出土した。このうちSM-3が最大規模の貝塚である。

礎石列の分布は、図6や写真4で紹介しているとおりである。今年度の発掘区の南側・西側・東側の概ね3カ所に集中して検出された。いずれも1間間隔が基本となっている。礎石の上に柱がのったままの状態で見出されたものもあった。

図10の1~5(写真19)は針入れ(チシポ)である。特に1aのチシポから水洗時に1bの針(ケム)が出てきた。33mmほどの短い針であるが、完形なのか、有孔であるかなどは錆化が顕著なため不明である。従来、針入れとみられていたものは、この事実によって紛れもなく針入れであるとの確証を得た。図10の6(写真7)は鹿角製のキテであり、7は角座を利用した鍔(セツパ)である。

伊藤論文にある鍔帯金具(表紙写真、図10)は、巡方(8)・丸納(9)各1点のみの出土である。

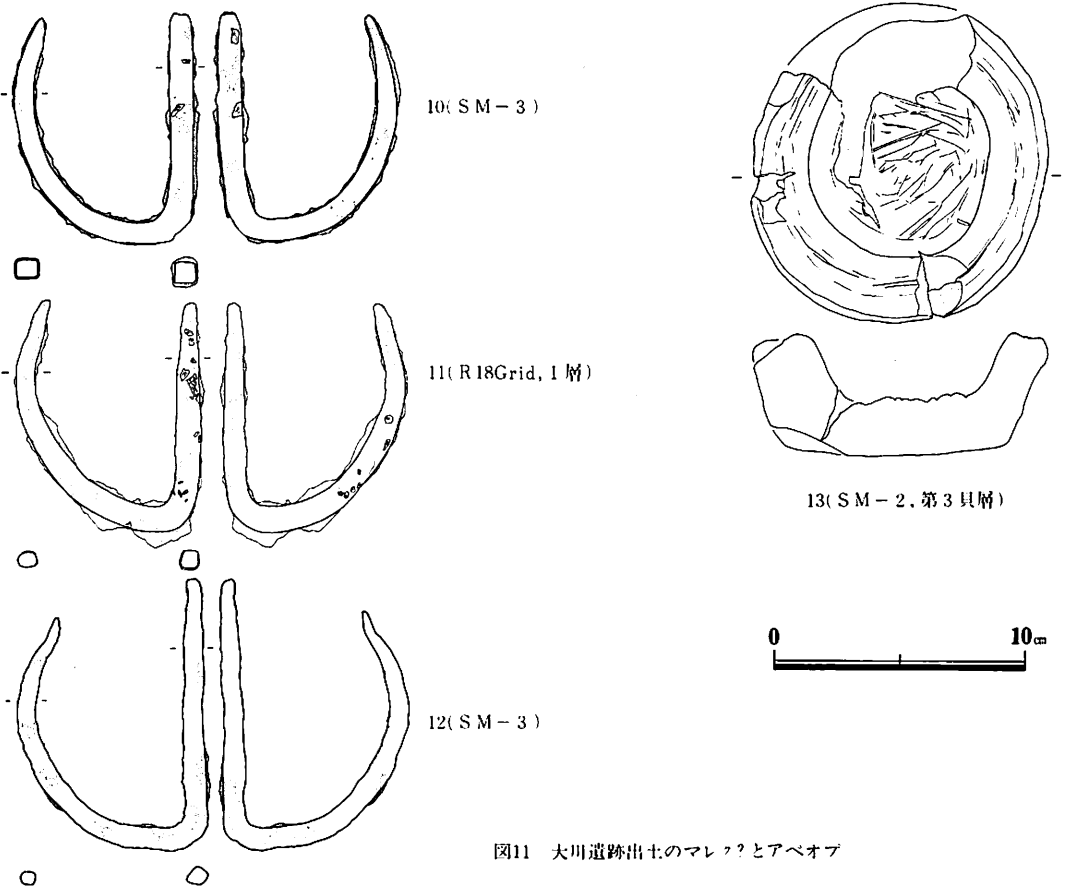


図11 大川遺跡出土のマレ??とアベオブ

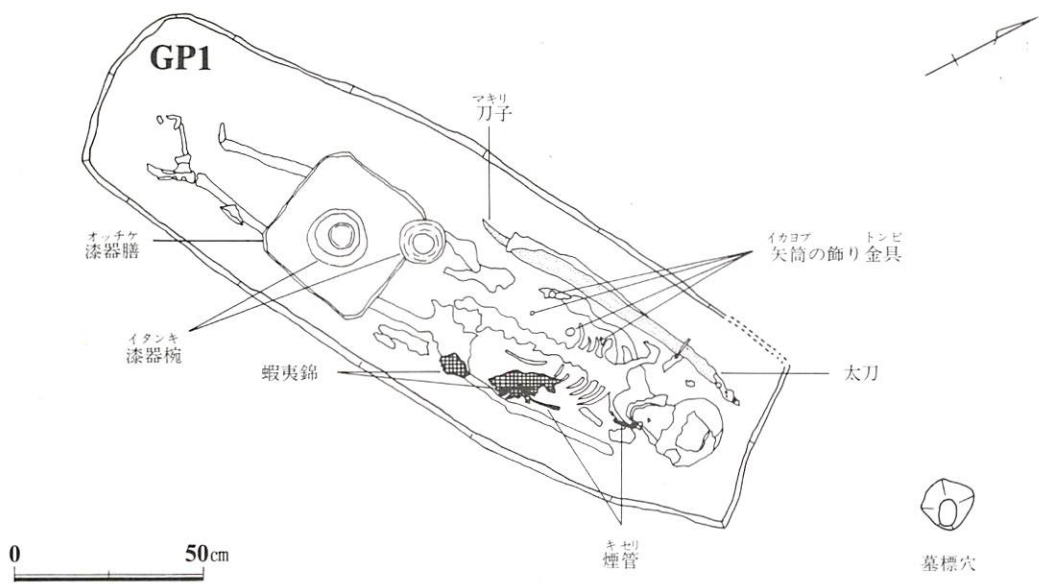


図12 大川遺跡GP-1 検出状況



写真20 大川遺跡GP-1 出土の蝦夷錦

巡方は、27mm（縦）×30mm（横）×3mm（厚）で10.8g、丸柄は、27mm（縦）×42mm（横）×7.5mm（厚）で17.7gであった。いずれも表金具のみで裏金具は出土していない。

図11の10～12（写真5）は、鉤（マレク？）とみられるが、それぞれ、若干形状が異なっている。図11の13（写真7）は、火皿（アペオプ）である。一部分を欠いている。凝灰岩質の軟かい石材を削りぬいて作出されている。底部内面は焼けている。出土した多数の煙管や、その喫煙儀礼とのかかわりからきわめて興味深い資料である。

写真23は、GP-1伴出の蝦夷錦である。絹の部分は腐敗し、ループ状の金糸のみが残存していた。龍文の鱗部分の断片で着衣に縫いつけられていたものと推察される。図12は蝦夷錦ほかの出土状況である。

今年度の調査区域は、発掘対象区域の中でも遺構・遺物が最も少ないとみられていたが、実際調査してみると実に多彩な内容を有するものであった。次年度以降の調査に期待するところである。

（宮）

1989年度大川遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要—

発行 余市町教育委員会
北海道余市町朝日町26番地

発行日 1990年3月

印刷所 ㈱毛利印刷
北海道余市町大川町1丁目26番地
